

第4章 『婦人之友』誌にみる住宅の平面図の概要

第1節 専門家設計住宅の平面図と『婦人之友』誌読者設計住宅の平面図

1. 専門家設計住宅の平面図と『婦人之友』誌読者設計住宅の平面図

大正期を中心とするデモクラシー期の『婦人之友』誌には、少なくとも157例の戸建住宅の平面図が掲載されている。既存の住宅の平面図や専門家の設計した住宅の平面図の紹介ばかりではなく、『婦人之友』誌読者の設計した住宅の平面図もたくさんみられる。そこで、本論をすすめるにあたり、まず設計者の別によって157例の住宅の平面図を分類した。平面図やその解説のなかからだけでなく、記事中のあらゆる情報のなかから設計者のわかるものを捕捉した。その結果、専門家の設計した住宅の平面図55例、『婦人之友』誌読者(おもに「主婦」)の設計した住宅の平面図76例、設計者不詳およびその他26例である。

専門家によって設計された住宅の平面図は、啓蒙的な性格をもったものが多く、少なくとも、遠藤 新のもの20例、橋口信助のもの5例の他、今 和次郎(3例)、土浦亀城(2例)、石川 徹(2例)、徳永 庸(2例)、大熊喜邦(2例)など、多くの建築家の作品がみられる。アメリカの伝道師であり建築家でもあったヴォリスの作品(2例)もみられる。博覧会に出品された作品(2例)や同潤會の分譲住宅の平面図(8例)もある。

橋口信助はアメリカでの体験を生かし、住宅専門の設計・施工会社「あめりか屋」を創設し、「住宅改良會」を創り、わが国最初の住宅専門雑誌『住宅』を刊行した人物である。

『婦人之友』誌には、明治時代のおわりから大正時代の初期にかけて、主として洋風組立住宅を紹介している。投稿記事には「住宅別荘専攻建築技師」の肩書きがついている。

遠藤 新はフランク・ロイド・ライトに直接指導を受けた建築家であり、住み手を教育し得る作品こそが良い建築である¹⁾という考えをもち、『婦人之友』誌にも、大正時代のおわり頃から多くの自作の洋風住宅を啓蒙的に紹介している。羽仁家とも親交があり、自由学園の設計に遠藤 新もたずさわっていることはよく知られているが、1929(昭和4)年には、和洋折衷の羽仁家も設計している。この頃から遠藤 新の設計する住宅には和室をとり入れた設計がみられるようになる。遠藤 新は、昭和時代の初期に他にもいくつかの「友の会」会員の住宅を設計しているが、いずれも和室がとり入れられている。

同潤會の分譲住宅は、家賃と同程度の金額を一定期間納めておれば自分の家になってし

まうというもので、合理的な生活像を求める『婦人之友』誌読者からも注目され、『婦人之友』誌にも同潤會の分譲住宅の平面図が紹介されている。これを専門家の住宅の平面図として分類するかどうかは議論のあるところだが、専門家を「住宅作家」ととらえるのではなく、「住宅のことを専門的に考えている人」と考えて、本研究では同潤會の分譲住宅の平面図も専門家の住宅の平面図として分類した。

『婦人之友』誌読者である「主婦」たちが設計した住宅の平面図は、おもに編集部が企画した「住みよき家の間取り圖」(1914)、「何んな住宅が欲しいか」(1921)、「理想と實際の小住宅」(1922)、「住宅建築問答」(1923～1924)、「臺所の工夫いろいろ」(1928)、「理想の我が家」(1933)などに投稿されたものである。『婦人之友』誌は創刊の頃から、「読者と懇親を結び、お互いに家庭のことを研究したい」²⁾という姿勢が強く、「読者との協同によって生活のなかに実現していく実験精神」³⁾の強い雑誌であった。『婦人之友』誌読者にも実践的な生活研究を進めている人たちが多かったようで、実践的で積極的なアイデアがたくさんみられる。本研究は生活者である「主婦」が、日常の生活のなかでの検証を経て、新しい住様式の形成にどうかかわったかをみる大きな目的であるため、『婦人之友』誌読者の設計した住宅の平面図は重要な資料である。しかし、あとで詳しくみるように、『婦人之友』誌読者が設計した住宅の平面図には、『婦人之友』誌に掲載された時点では実際に建設されているものはそれほど多くはない。建てるつもりで設計してみても専門家の指導を仰ぐというものや、設計を考えることが好きで、せめて紙の上でその完成を楽しみたいというものが多かったようである。けれども「何んな住宅が欲しいか 暖かさうな小洋館」(1921.4.)は「明年あたり建築したい」ものであり、「何んな住宅が欲しいか二 米國で建てる積りの家」(1921.5.)は「今年か明年米國に建てるつमりの圖面をお目に懸けてご批判を仰ぎます」であり、「理想と實際の小住宅 低利資金で建てる家」(1922.11.)は「大藏省の住宅建築低利資金を借受けられることになりましたので」設計したものであり、「理想の我が家 入選1 健康的な子供本位の家」(1933.10.)は「數年前に買い求めてある手頃な敷地に建てるつमりの設計」であり、近い将来に具体的に建設の計画をもっているものも多く、架空の夢物語のような住宅の平面図はほとんどない。現実的なものが多いので、この当時の都市「中流階層」の「主婦」たちの住居に関する意識を分析・考察するには適した資料であると考えられる。

「その他・設計者不詳」のものとしては、設計者がわからないものの他に、居住者が専門家のアドバイスを受けながら設計したもの、居住者が設計したものに専門家が手を加え

たもの、改築例や古い住宅の住みこなし方の紹介などがふくまれる。

『婦人之友』誌に掲載されている住宅の平面図を本報告に引用する場合には、できるだけ原文のまま引用した。本報告では建築の専門家の設計した住宅の平面図というよりは、『婦人之友』誌読者が設計して、描いた住宅の平面図の方に注目して分析をすすめているが、『婦人之友』誌読者が描いた住宅の平面図は、設計の内容だけではなく、表示法もふくめて、当時の『婦人之友』誌読者の住宅や住生活に関する関心や知識・技能の程度を推しはかる資料としても価値があると考えたからである。ただ、『婦人之友』誌読者の設計した住宅の平面図について、雑誌掲載の折に編集部で書き直しをしているかどうかという点については確認できていない。

古い『婦人之友』誌にはマイクロフィルム化された資料からしか複写できなかつたものもあり、『婦人之友』誌現物から複写したものでも、雑誌の保存状態によっては鮮明な複写ができなかつたものもあるので、つぎの方法で一部補った。

①文字の読解が困難な平面図は室名呼称を活字によって補った（*）。

②全体の判読が困難な平面図は筆者が清書した（**）。

また、住宅の平面図の引用にあたっては、できるだけ北が上、南が下になるようにした。縮尺は約 1/200 に統一した。

2. 設計者の別と住宅の平面図の型

専門家が設計した住宅には「居間中心型」住宅が多い。「居間中心形（型）」住宅の命名者は木村徳國だとされている⁴⁾。木村徳國は「居間中心形住宅平面の特徴」⁵⁾として、いくつかをあげているが、その主要なものは、①イス座の居間を平面の要におく ②居間は通路的性格を有することであり、『婦人之友』誌に掲載されている、橋口信助や遠藤

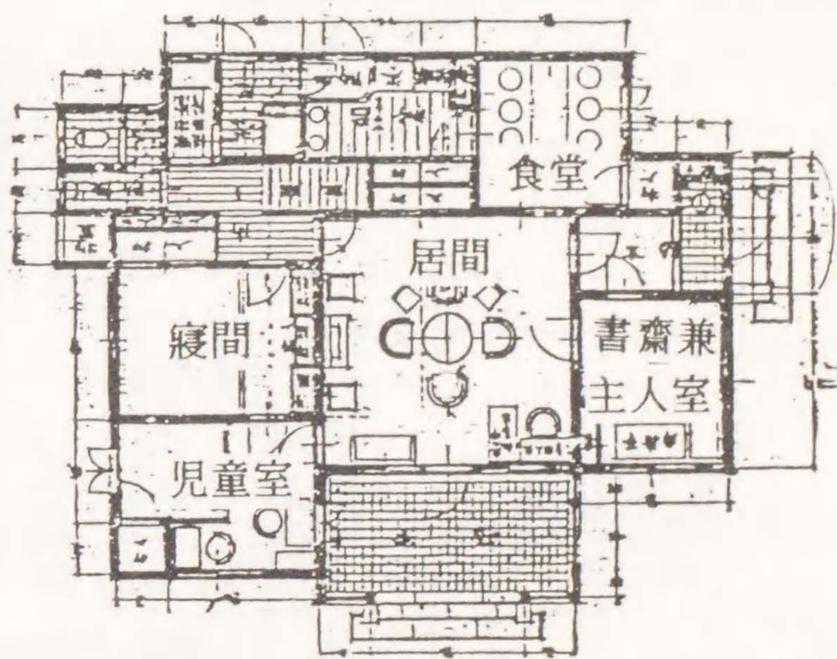


図 4-1 大熊喜邦

平和博覧会に出品さるべき作品 (1922) *

新の作品をはじめ専門家の設計した住宅にはこの特徴を備えたものが多い。55例中30例が住宅の平面図の中心にイス座で通り抜けの居間をもっているものである。とくに明治時代末期から大正時代のものに多い。

同潤會の分譲住宅には「中廊下型」住宅が多い。「居室の通り抜けを廢し、各室のプライバシーを高めた中廊下にちなんで、『中廊下形(型)住宅』と最初に命名したのも、木村徳國である」⁴⁾とされている。木村徳國は「中廊下形住宅の典型的平面例」⁶⁾としていくつかの点をあげているが、おもなものは、①平面全体が東西に長い矩形にコンパクトにまとまり、中廊下が東西に貫通している ②中廊下の南側は居室部、北側は附帯部分である の2点である。同潤會の分譲住宅はほとんど全部がこうした特徴をもっている。

これに対して、『婦人之友』誌読者が設計した住宅の平面図は、「居間中心型」とも「中廊下型」ともいえないものが多い。

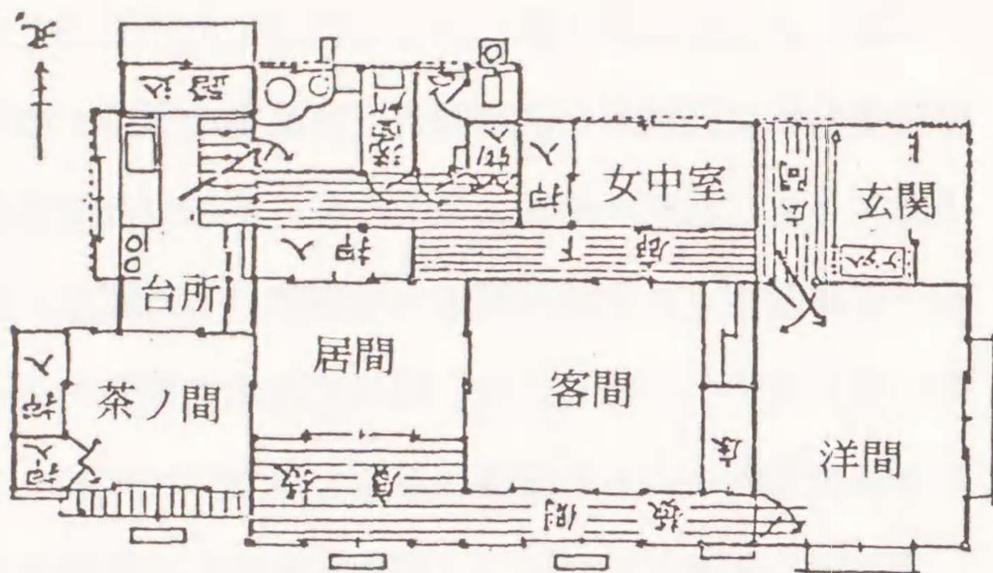


図 4-2 同潤會
江古田分譲住宅(1934)*

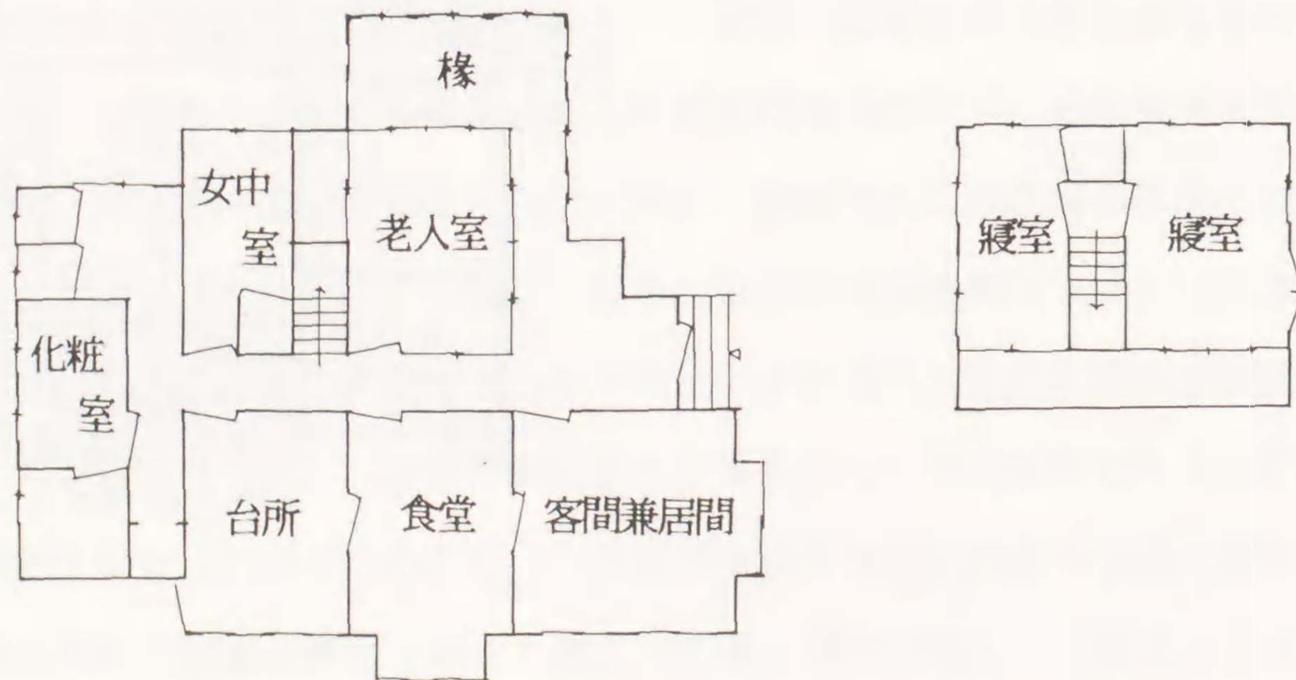


図 4-3 『婦人之友』誌読者 住宅建築問答 小さな西洋館(1923)**

どちらかといえば、「中廊下型」住宅をベースにしているが、一部に洋風を取り入れたり、保健・衛生や能率の工夫をしたものが多い。家族のだんらん室や食事室や台所や子ども室や老人室など家族が日常的によく使う部屋に日照を得るために、また家族のための空間だけではなく接客のための空間にも日照を得るために、軸を振ったり、部屋と部屋とを縁側でつないだり、日照を得るために二階建てにするなど、涙ぐましい努力をしているものもみられる。部屋の通り抜けを廃すために、あるいは「主婦室」を確保するために、かなり苦勞のあとがみられる平面図も多い。平面図としての完成度という点ではいまひとつというものもあるが、意気込みだけは十分に伝わってくる平面図が多い。

第2節 『婦人之友』誌掲載住宅の規模と「中流住宅」の規模

『婦人之友』誌に掲載されている住宅の平面図の規模は、当時の「中流住宅」の規模とほぼ一致している。

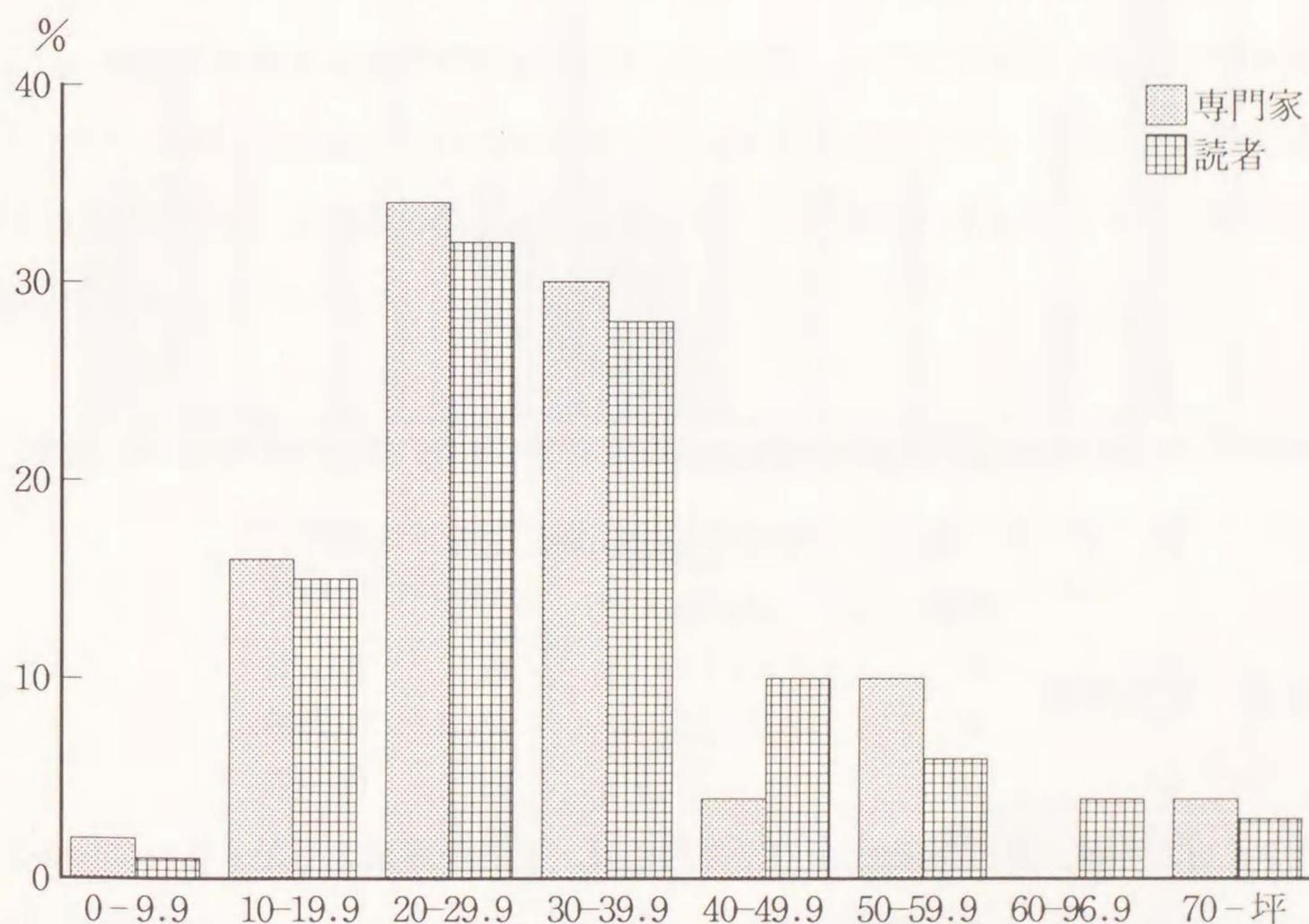


図 4-4 設計者の種類別住宅規模の分布

専門家の設計したものは 6.7坪の簡易住宅から76坪の大邸宅におよんでいるがその平均は31.9坪であり、『婦人之友』誌読者の設計したものは 9坪から81坪までで、平均32.0坪

である。全体の平均は31.9坪であり、専門家の設計したものと『婦人之友』誌読者が設計したものとは、規模の差はあまりみられない。このうち70坪をこえる大邸宅は5例、15坪にみたない小住宅は6例あるが、それらを除いてもそれぞれの平均は31.0坪、31.8坪となる。年代別にもばらつきはあるものの、論ずるほどには、住宅規模の大きさと年代との関連はみられない。大正時代・昭和時代を通じて住宅改良の最大の対象となった「『中流住宅』の中核は、30坪前後」⁷⁾であり、『婦人之友』誌に掲載されている住宅の平面図の規模はほぼこれに一致する。

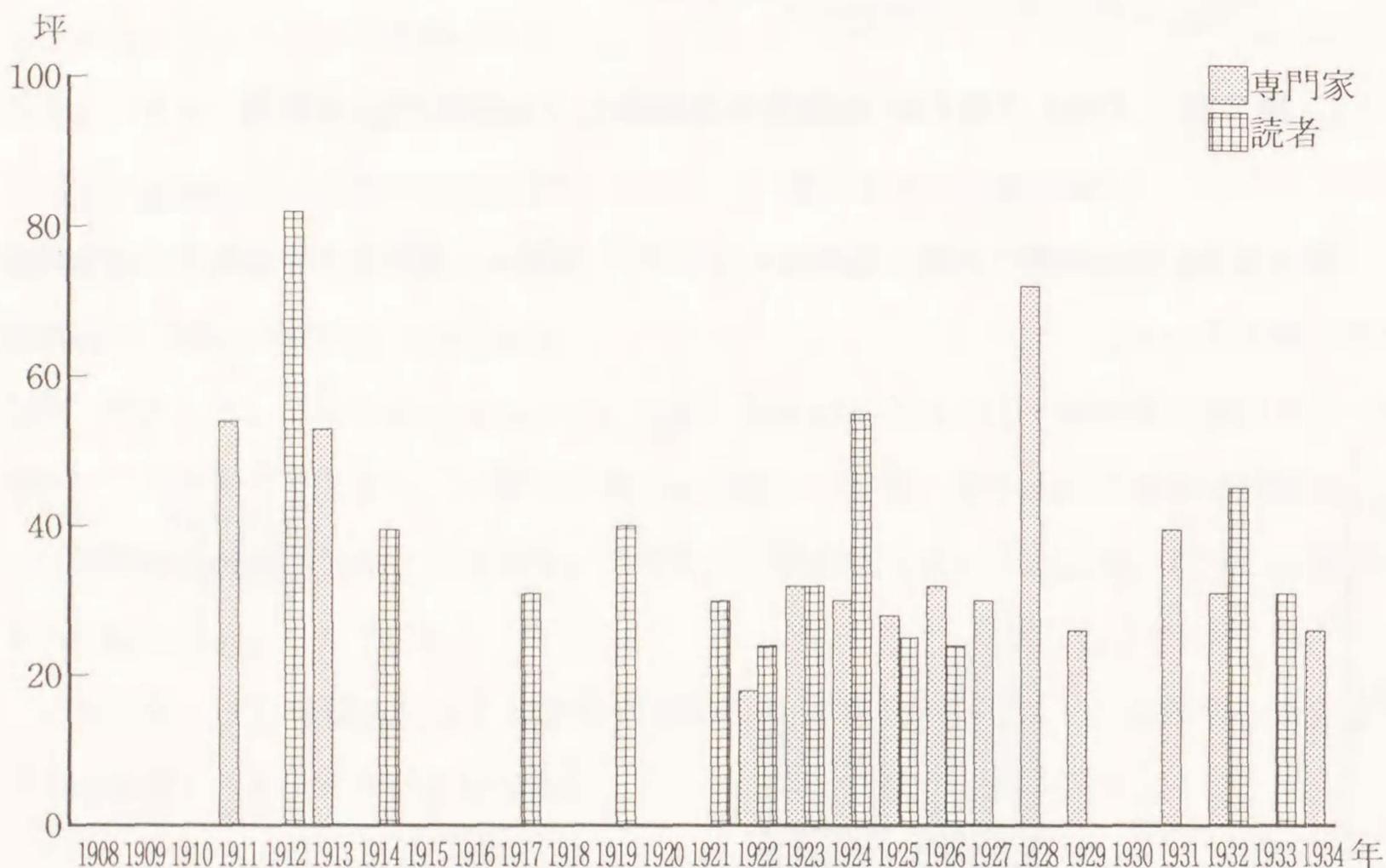


図 4-5 経年別・設計者の種類別住宅の平均建坪

第3節 室名呼称

『婦人之友』誌に掲載されている住宅の平面図には、室名呼称がよく記入されている。機能による室名呼称がないものも関連記事によって推測できるものが多く、部屋の使い方がまったくわからないというものは少ない。単に部屋の呼称というだけではなく、部屋の機能を克明に記入したものが多く、部屋の使い方をみるという本研究の目的のためには有効な資料である。たとえば、食事をする部屋の呼称についてみると、「食堂」(54例)、「食事室」(3例)、「茶の間」(33例)、「茶の間兼食堂」(1例)のほか、「居間兼食堂」

(6例), 「居間食堂」(3例), 「食堂兼居間」(4例), 「居間兼茶の間」(2例), 「茶の間兼居間」(1例)のように居間を兼ねるもの, 「應接居間食堂」(1例), 「客間兼食堂」(1例), 「客間食堂兼用」(1例)のように接客空間を兼ねるもの, 「主婦居間兼食堂」(1例), 「食堂兼主婦室」(1例), 「主婦居間兼茶の間」(1例)のように「主婦室」を兼ねるもの, 「食堂兼居間兼客間」(1例), 「書齋居間寢室食堂兼用の部屋」(1例), 「茶の間兼主婦小児室」(1例)のように3つ以上の機能を兼ねるものなどがみられる。「食堂炊事室」(1例), 「茶の間女中部屋兼用」(1例), 「茶の間又は女中」(1例)などもある。このように呼称は多種多様で多岐にわたっており, 単なる部屋の呼び名というよりは実際の機能にもとづいた呼称がかなり克明に記入されている。

第4節 オリエンテーション

『婦人之友』誌に掲載されている住宅の平面図には, 方位記号もよく記入されている。日照やオリエンテーションなどへの関心が強かったことを反映しているものと考えられる。また, 雑誌に掲載する住宅の平面図ということで, とくにそうした配慮がなされたのかもしれない。設計者の別に方位記号の記入状況をみると表 4-1 のとおりであり, とりわけ『婦人之友』誌読者の設計したものには, 方位記号の記入されているものが多い。8割以上におよんでいる。

表 4-1 設計者の種類別方位記号の記入状況

設計者別図面数	記号あり (うち軸傾斜)	本文 から推測	記入なし
読者 74	60 (15)	8	6
専門家 57	28 (6)	8	21
他不明 26	13	10	3
計 157	101	26	30

方位記号が記入されていないものには, 関連記事から方位が推測できるものも多く, 方位がまったくつかめないものは6例しかみられない。これに対して, 専門家の設計したものには, 方位の記入されていないものも比較的多い。詳しくみると, 橋口信助の紹介している住宅の平面図には, まったく方位が記入されていない。組立住宅の紹介ということも

関係していると考えられる。また遠藤 新の設計した住宅の平面図にも、方位記号の記入されていないものが多い。遠藤 新の設計した住宅は全部で20例掲載されているが、そのなかで方位記号の記入されているものは9例しかない。しかもそのうち5例は軸を振ったものである。上を北、下を南に描かれた住宅の平面図には、方位記号の記入されていないものが多いことが考えられる。他の専門家の住宅の平面図にもあきらかに上を北に描いた平面図で、方位記号を記入しなかったとみられるものが多い。また、平和博覧会「文化村」に出品された作品や同潤會の分譲住宅のカタログのようなものにも方位記号の記入されていないものがみられる。このようにみてくると、『婦人之友』誌に掲載されている住宅の平面図は、実質的にはかなり多くの住宅の平面図の方位が読めるということになる。

『婦人之友』誌に掲載されている住宅の平面図の方位について、気がつくことは2点ある。第1点目は、軸をきちんと東西南北にとっている住宅の平面図が多いことである。軸を東西南北にとることについては「家の建て方と間取りを、すべて、東西南北の十文字の直線に取つてありますから、家全體が通風にも採光にも氣持のいゝほどよくできてゐます。一日の光線の具合を考慮するとともに、春夏秋冬の日當りの具合、寒暑の具合を考へて造られてあります」(1932.11.P88)のような記事もあり、保健・衛生的な配慮がいきとどいていたものと考えられる。また、敷地規模の記入例はそれほど多くないが、記述のあるものには数百坪以上というものが多く、敷地の狭さによって住宅の方位が制約を受けるということが比較的少なかったためであると考えられる。

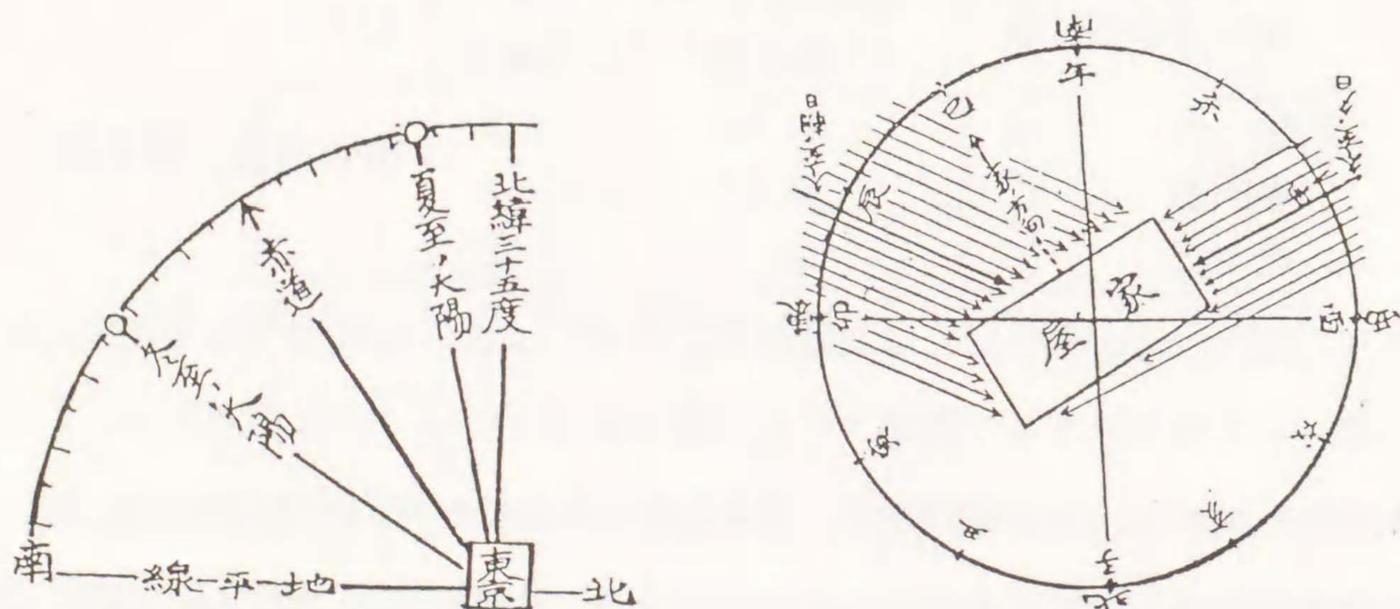
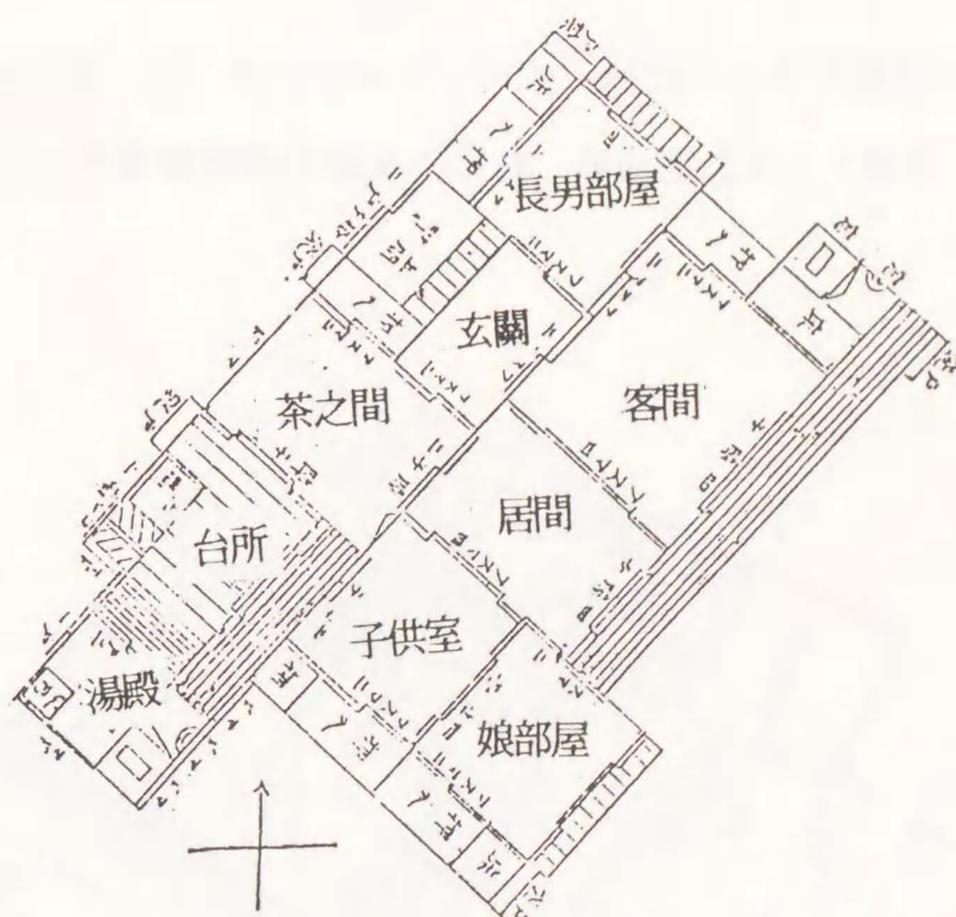
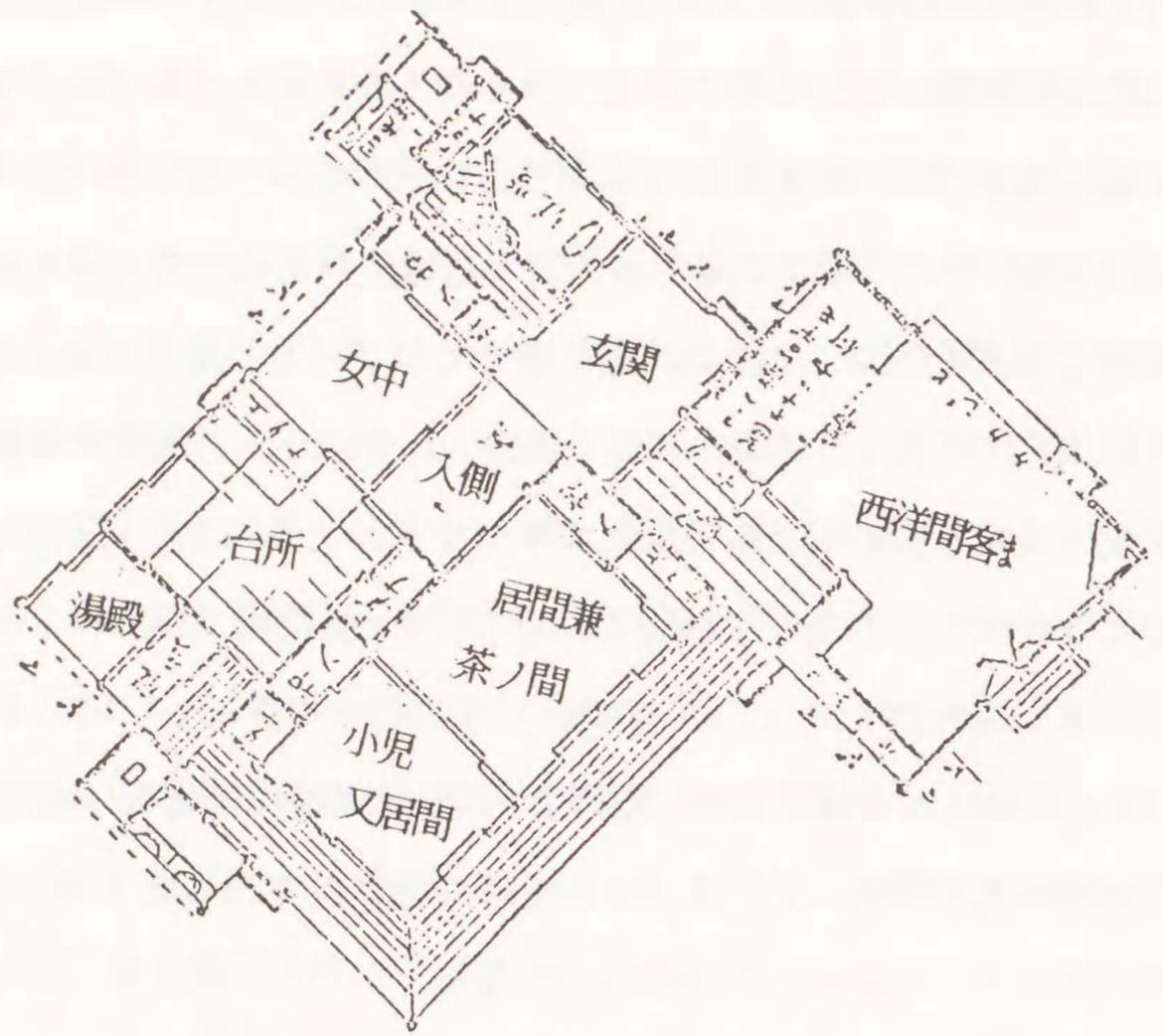


図 4-6 年中四方に日光を受ける家(『婦人之友』誌1914.4.)より

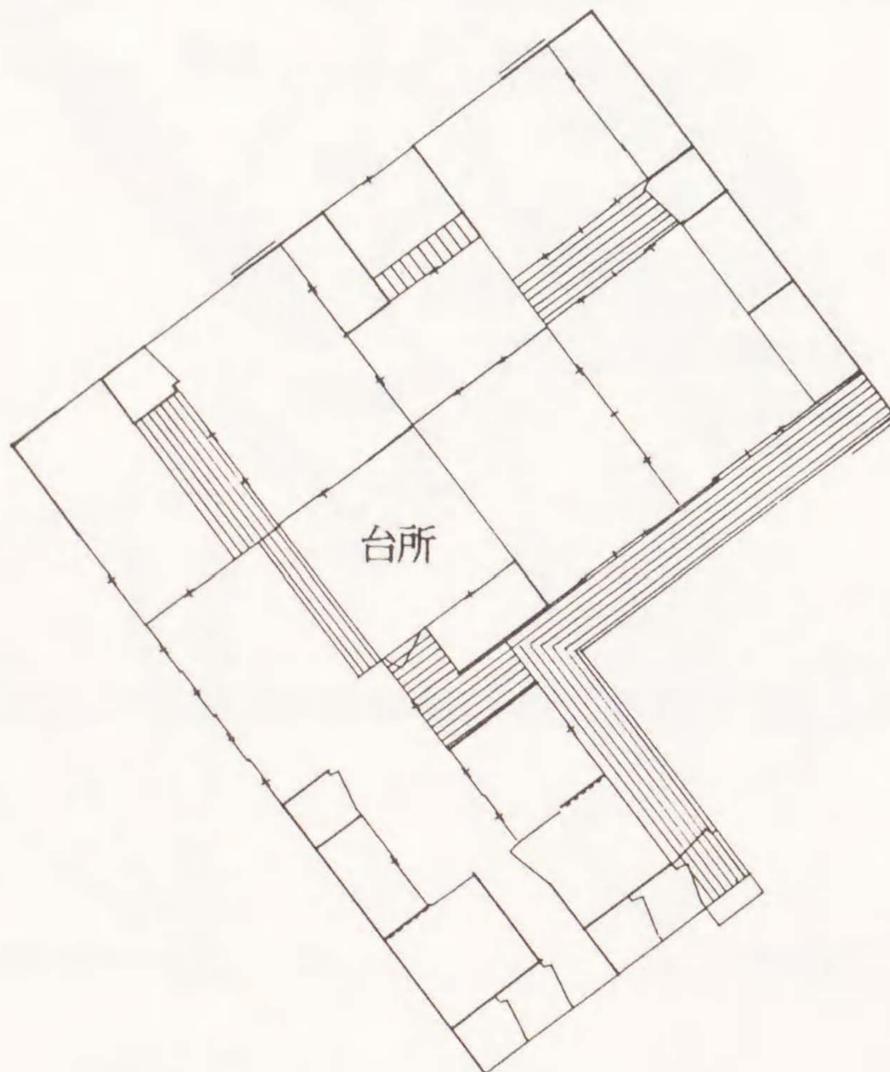
第2点目は、それにもかかわらず、軸を振っているものがいくつもあることである。もちろん敷地との関係から、方位を振らざるをえないものもあったようであるが、なかには、意図的に軸を振っているのではないかと考えられるものもある。記事中には、「家の方向を正南に向けずに、正南より少し東の方に向けるか、若しくは少し西の方に振る」（記者：1914.4.P89）や「一年中太陽がよく當るには、眞南とするよりも東に十度か十五度傾けて家を建てるとよいのです。冬は室の奥まで日が入るし夏は太陽の位置が高くなるから冬程深くは入ってこない」（櫻井省吾：1929.10.P119）、「重要な部屋を南側にし、階段、浴室、便所等を北側にしたのは當然の事ですが、北側に全く太陽があたらないのも、衛生上良くないので、十五度だけ西方に向けて」（土浦亀城：1931.2.P5）、のような専門家のアドバイスがみられたり、「光線の能くさしこむやうに」（1914.4.P72）、「各室とも日當りよく」（1921.4.P44）、という説明つきの平面図に軸を振ったものがみられることから、どの部屋にも日照を、という考えから軸を意図的に振ったものもあると考えられる。



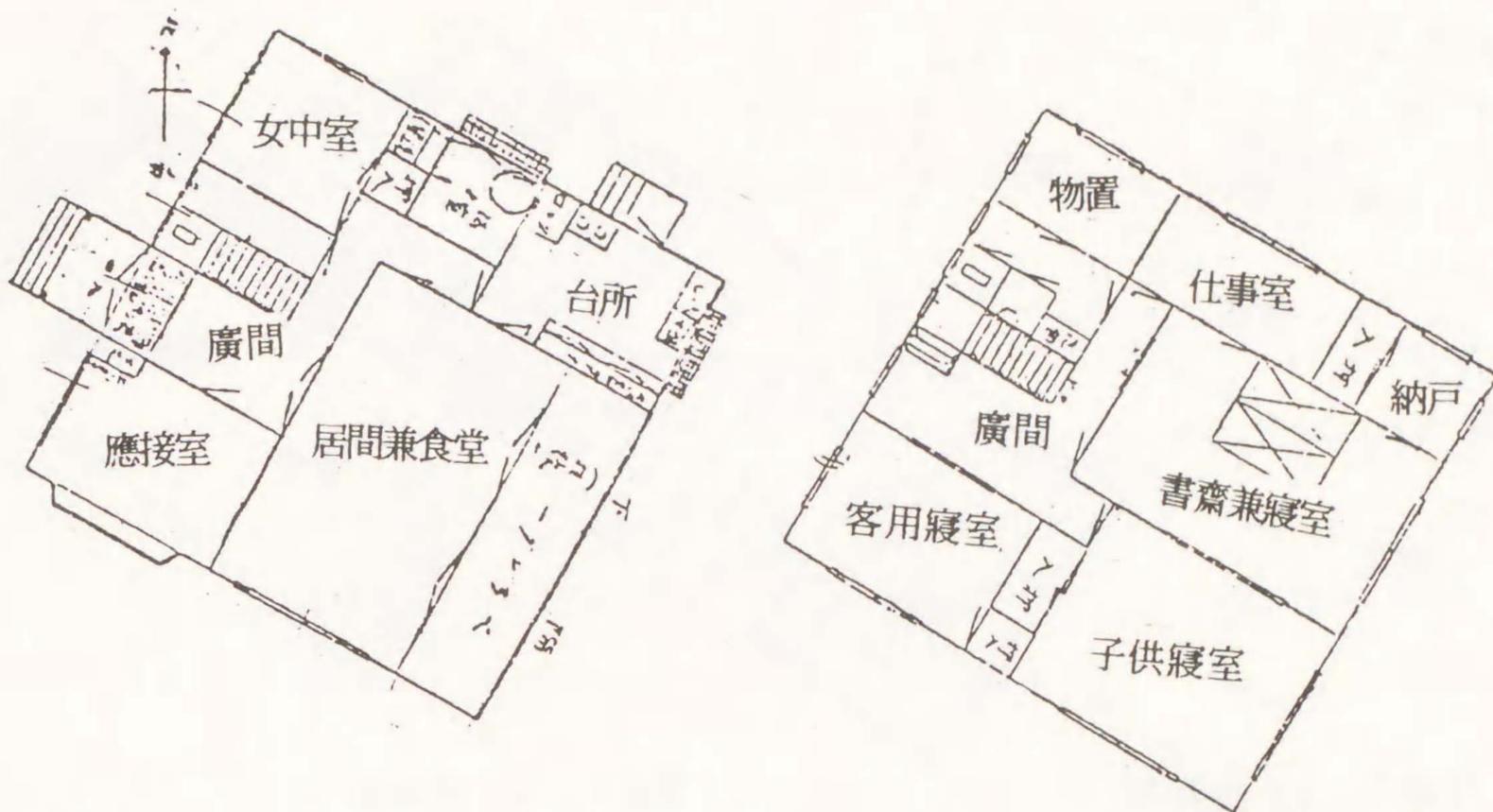
『婦人之友』誌読者 住みよき家の間取圖其九(1914)*



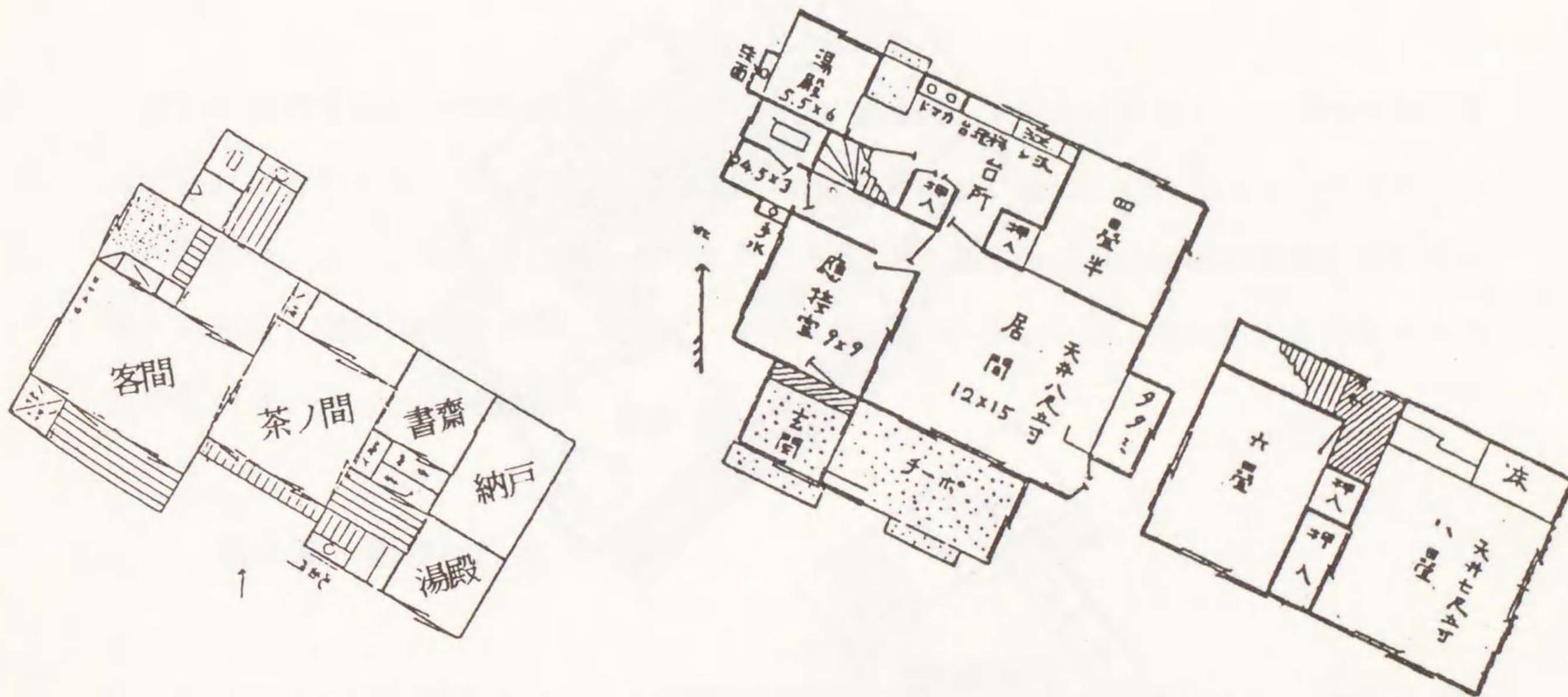
『婦人之友』誌読者 住みよき家の間取圖其十五(1914)*



『婦人之友』誌読者 住みよき家の間取圖其十六(1914)**

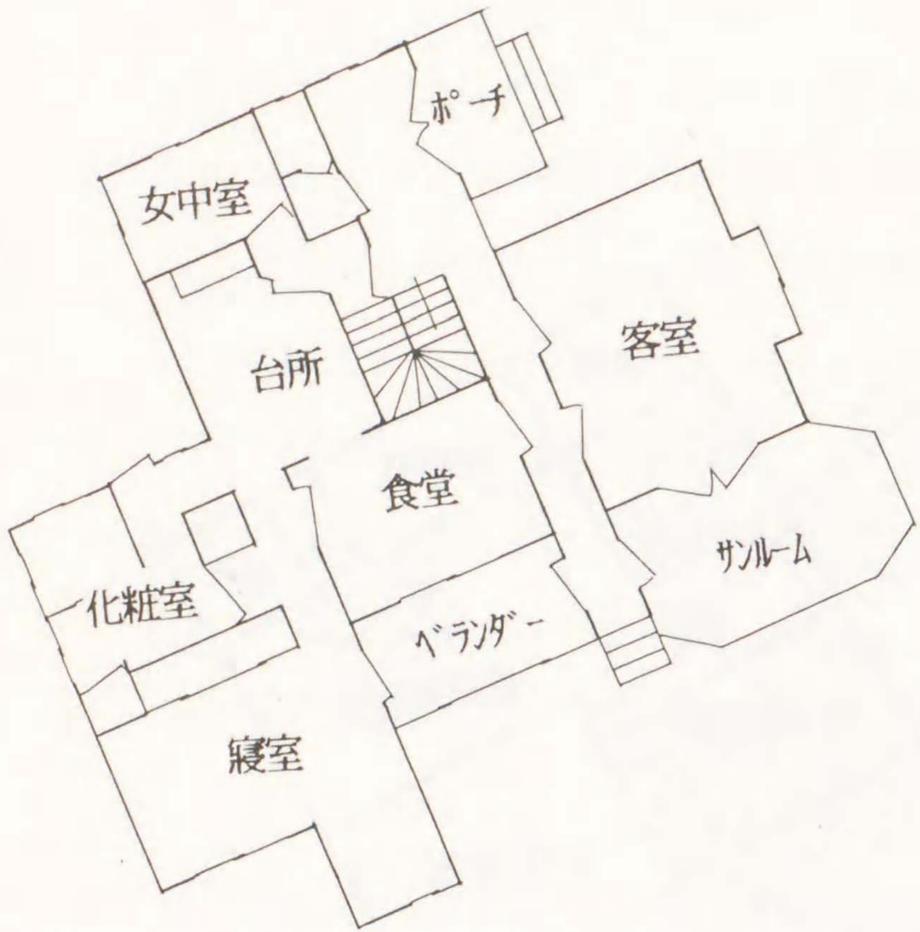


『婦人之友』誌読者 何んな住宅が欲しいか 暖かさらな小洋館(1921)*

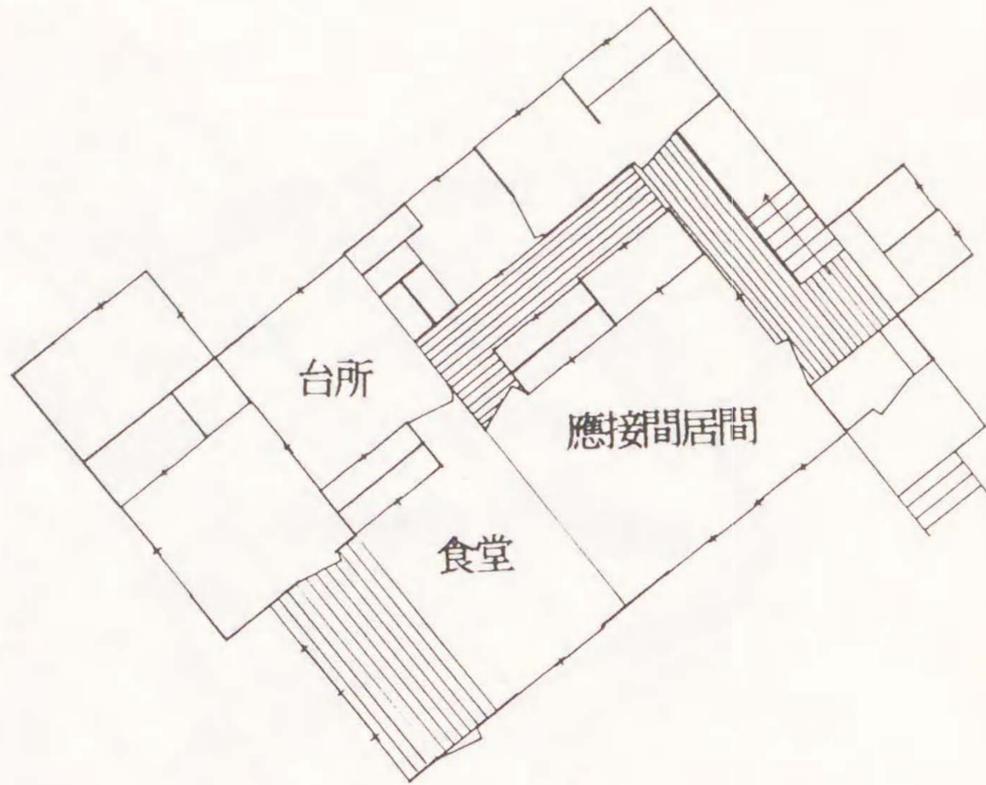


『婦人之友』誌読者
趣味の家 落合村に建てられた
野口幽香子女史の隠棲(1922)*

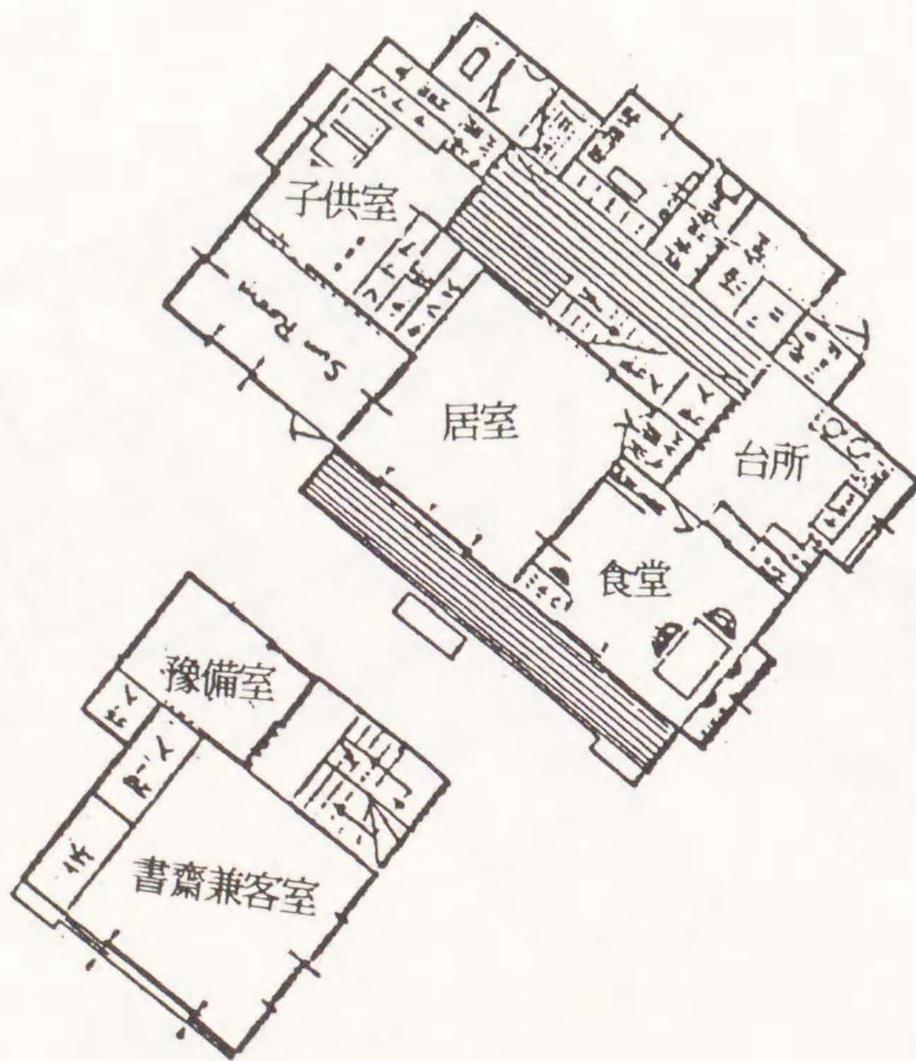
『婦人之友』誌読者
理想と實際の小住宅
小さな折衷式の家(1922)



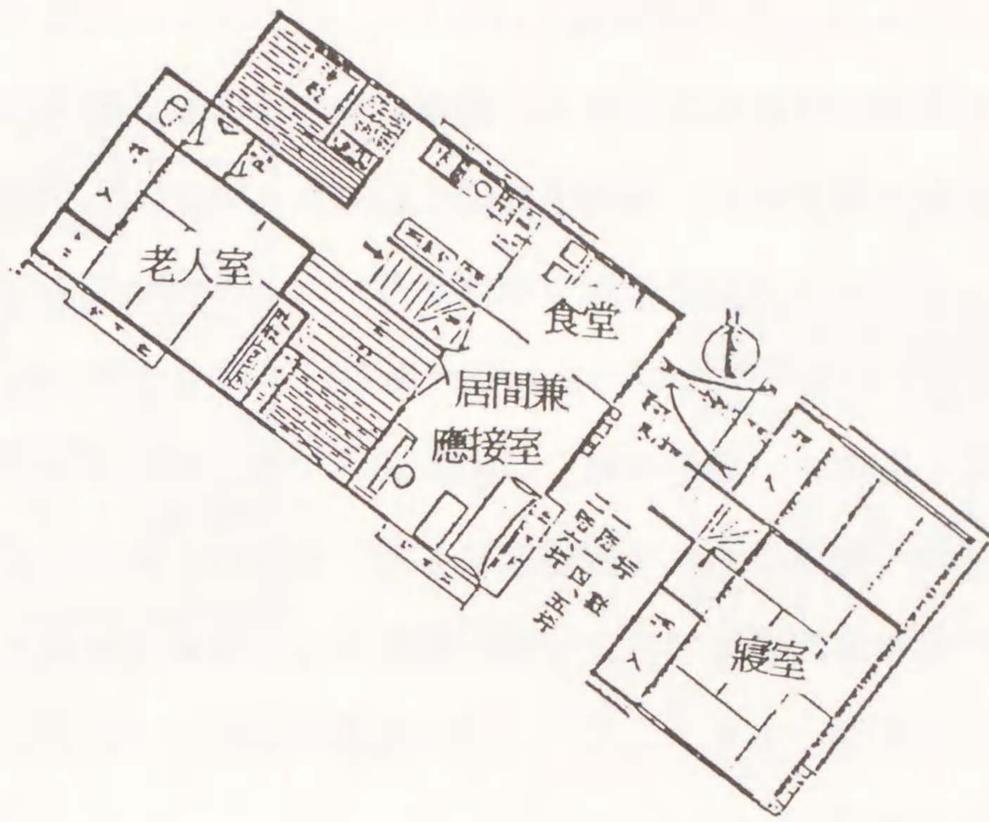
『婦人之友』誌読者
住宅建築問答
洋風住宅の私案(1923)**



『婦人之友』誌読者
南澤に建った小脇氏の家(1928)**



『婦人之友』誌読者 理想の我が家 経済能率簡易(1933)*



『婦人之友』誌読者 理想の我が家 二十坪半の小住宅(1933)*

図 4-7 軸が傾斜している住宅の平面図例

第5節 寸法

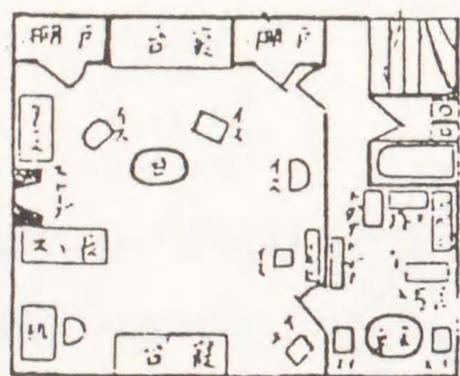
ほとんどの平面図が適当な寸法に仕上げられている。なかにはかなりいい加減に書いたと思われるものもあるが、和室がふくまれる平図面は、だいたいおおまかな寸法がわかるものが多い。永年、畳に慣れ親しんできた日本人の国民性のようなものが影響していると考えられる。間仕切や建具についても、材質まではわからないが、壁面か引き戸かドアか位はだいたい読める平面図が多い。

第6節 簡易な住宅

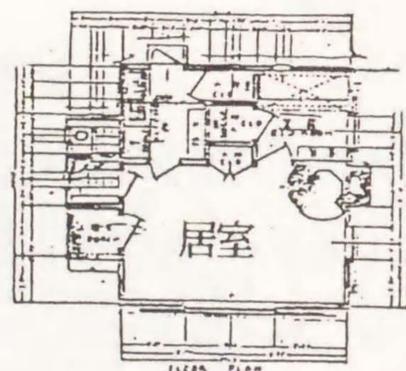
『婦人之友』誌に掲載されている住宅の平面図をみていて気がつくことは、簡易を求めて、ワンルームあるいはこれに近い住宅の平面図がいくつもみられることである。「二室の家」(1921.5.), 「文化的九尺二間」(ヴォリス:1922.9.), 「私の設計しつつある一間の家」(1922.11.), 「十三坪半で浴室まである美しい家」(1924.12.), 「夫婦共同設計の

明るい無駄のない家」(土浦亀城：1932.3.)，「凡ゆる意味での実験住宅」(山越邦彦：1933.10.)など，寝室だけは別にとるが，パブリックスペースは全体で1室のみというものが多。なかには「たった二室の西洋館」(1914.4.)のように，二室ではあるが，台所食堂とそれ以外のものとを分けたものがあり，居間にもちこまれる寝台について，「寝臺と申しても，斯うした室に置くのは，長椅子の様に出来たもので，上へ織物のやうな被でも掛けて置きますと，少しも目ざはりにならぬばかりでなく，椅子にも代用されて調法で御座います」(1914.4.)という説明のついたものがある。「簡易生活から出発した一間の家」(1922.11.)，「最小限度十一坪半の家」(1933.10.)では，寝室もふくめてすべて1室となっている。それぞれ「寝臺はすべて折疊式にして，晝間は家族用のものは，二臺重ねて主婦用仕事臺とし，また客用のものは，二脚の椅子として臨時用に備へ，夜間使用の時は総べてカーテンを以て区切ります」，「ベッドは折疊み式にして，押入の中に入っています」という説明つきである。

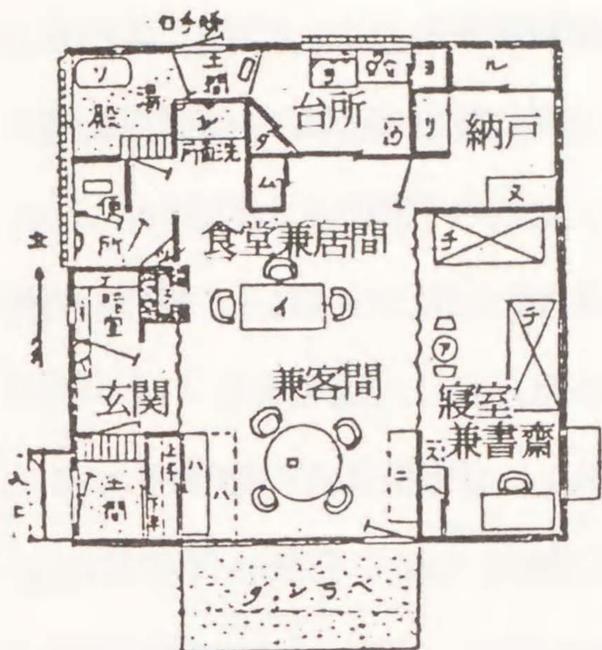
専門家による設計のもの・『婦人之友』誌読者の設計したものの別を問わず，こうした簡易な実験的な住宅の平面図がいくつもみられる。



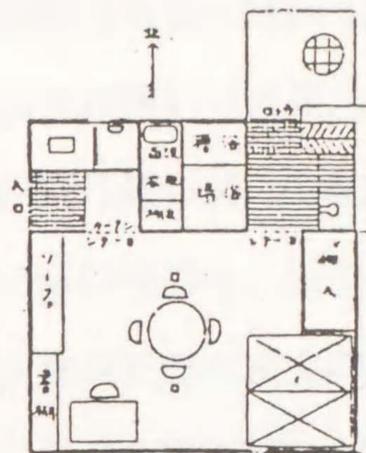
設計者不詳
たった二室の西洋館(1914)



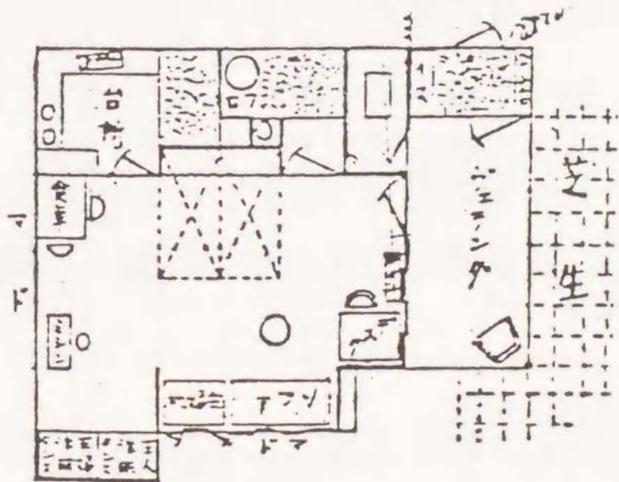
ヴォリス
文化的九尺二間(1922)*



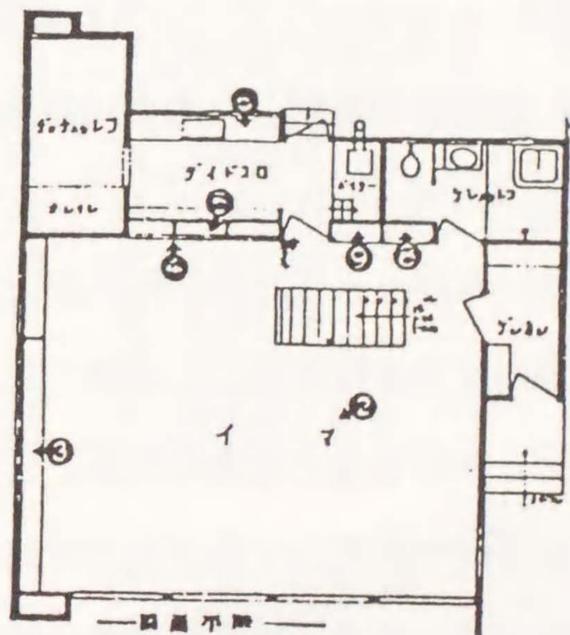
『婦人之友』誌読者
理想と實際の小住宅
私の設計しつつある一間の家(1922)*



『婦人之友』誌読者
理想と實際の小住宅
簡易生活から出發した一間の家(1922)



『婦人之友』誌読者
理想の我が家
最小限度十一坪半の家(1933)



土浦亀城
夫婦共同設計の明るい無駄のない家(1932)

図 4-8 簡易な住宅の平面図例

第7節 実際に建設された住宅の割合

『婦人之友』誌に掲載された住宅の平面図は157例であるが、そのなかで実際に建設されたことがはっきりつかめるものは84例である。設計者の種類別のうちわけは、専門家の設計したもの48例、『婦人之友』誌読者の設計したもの14例、設計者不詳およびその他のもの22例である。とりわけ『婦人之友』誌読者の設計した住宅の平面図には設計のみのもので、あるいは、記事掲載時以降に建設される計画のものが多い。たとえば、「理想と実際の小住宅 私の頭に熟した理想の家」(1922.11.)の京都のみどりは「ふとしたことから住宅と云ふことに興味をもつやうになり」投稿したものであり、「何んな住宅が欲しいか二米國で建てる積りの家」(1921.5.)、「住宅建築問答 郊外へ建てる家」(1923.7.)、「理想の我が家 佳作1 北滿に建てる農家」(1933.10)などは、近い将来に住宅建設の計画をもつものである。

第8節 「主婦」の部屋

この時代の『婦人之友』誌には、「主婦室」、「主婦部屋」、「主婦居間」、など「主婦」の常住の場をあらわす室名呼称が16の住宅平面図に見られる（「主婦居室」と「茶間兼主婦小児室」と両方をもっている住宅平面図が1例ある）。設計者別のうちわけは、『婦人之友』誌読者の設計したもの12例、専門家の設計したもの2例、設計者不詳のもの2例である。

大正時代は「主婦」と子どもの時代だといわれるが、そうした風潮のなかで、「主婦」や子どもに関心が向きはじめ、この時代に「主人書齋」に対するものとして「主婦」の常住の場が注目されたものと考えられる。

いろいろな著述や博覧会の展示などで具体的に「主婦室」が提案されたことも、「主婦室」や「主婦居間」の考え方を広く普及することに役立ったものと考えられる。

実利的には、「女中」が払底したり、職業をもつ「主婦」が増えたりして、「主婦」の事務や家事を能率化することが求められていたのであろう。『婦人之友』誌にも、1911(明治44)年10月号に、「これからは女中もだんだん沸底になって参りますから一略一女中も減らし、其の上主婦が職業をもつとか、又は自身の勉強でもしよとしますと、どうしても従来な生活法を改めてゆかねばなりません。これまでの一般の家庭の仕来りを見ます

と、随分改良の餘地がございます。徒らに主婦の労力を費やすことが少くないやうで一略一改良してゆきたい」という記者の記事があり、具体的に「事務室のやう」な「主婦の部屋」が提言されている。

また、『婦人之友』誌1912(明治45)年4月号には、英國に長く滞在した西洋畫家 原撫松が「彼地では家の主要部は、主人の居間即ち書齋と、これに次では主婦の居間でありまして」と述べており、外国の住宅の影響もあったものと考えられる。

興味深いことには、分析期間をとおしてみると、平面図のなかに「主婦」の部屋がみられるのは大正時代までだということである。町田玲子によると、「昭和初期の庶民住宅設計案に主婦室のある例がよくみられる」⁸⁾というが、1926年から1934年までの『婦人之友』誌には、「主婦室」などの呼称はみられない。

昭和時代に入って、「主婦室」などの室名呼称が見られなくなることの理由について考察するために、『婦人之友』誌にみられる「主婦室」などの実態や使い方を詳しく検討する。

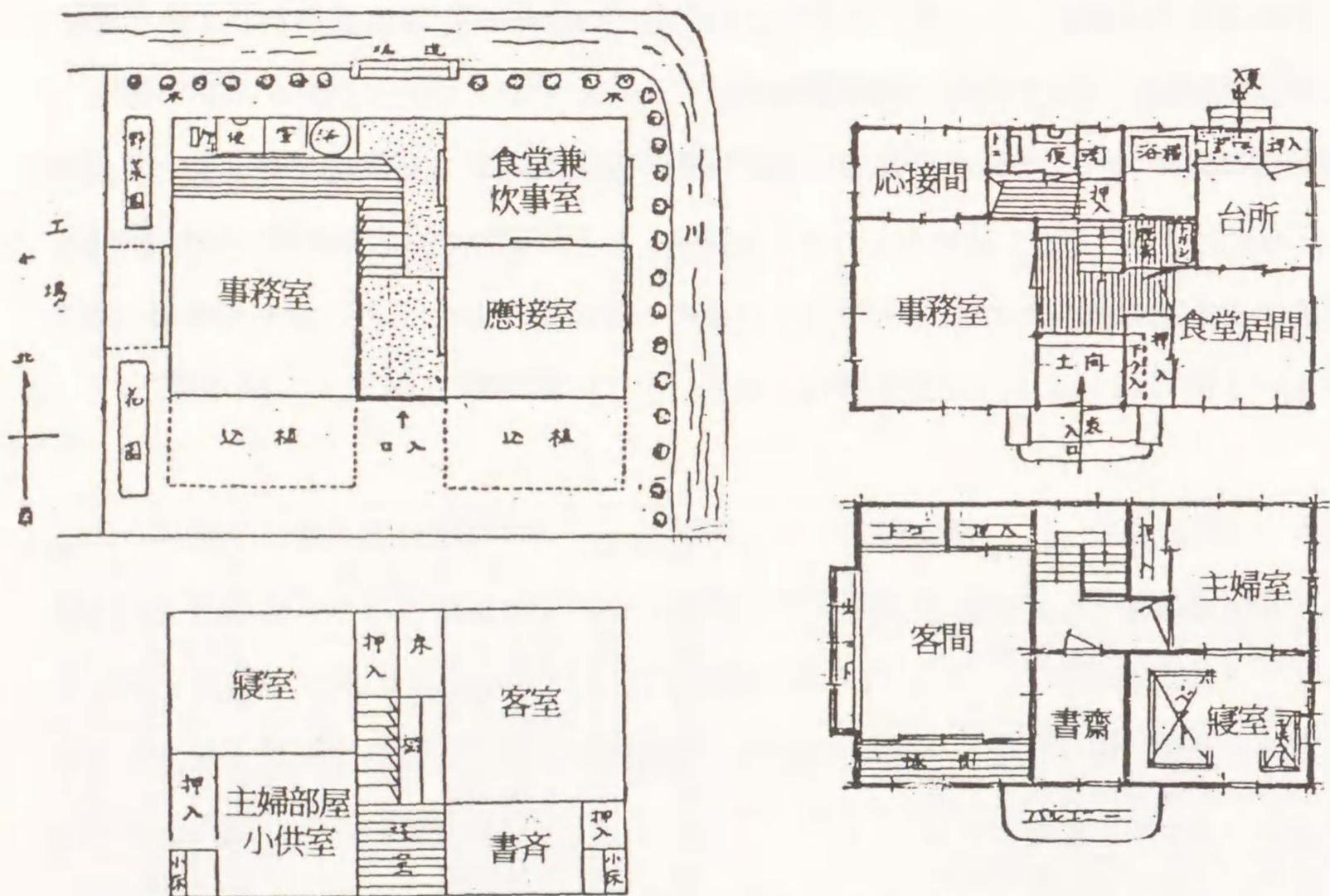
『婦人之友』誌に掲載された「主婦室」などの一覧は表 4-2 のとおりであり、明治末年のもの1例のほかはすべて大正時代である。

年	記事表題	設計者	「主婦室」などの室名呼称	和洋	方位	広さ(畳)
1912	子供本位に建てられた家	読者	主婦居間	和	南	8.0
1914	住みよき家の間取圖其六	読者	主婦居室	和	西南	4.5
		読者	茶間兼主婦小兒室	和	南	6.0
1914	住みよき家の間取圖其十	読者	主婦居間兼茶ノ間	和	南	6.0
1914	住みよき家の間取圖其十三	読者	主婦部屋	和	南	8.0
1914	住みよき家の間取圖其十四	読者	主婦居間兼食堂	和	南西	10.0
1914	住みよき家の間取圖其十七	読者	主婦居間	和	南	4.5
1914	住みよき家の間取圖其十八	読者	主婦居間	和	南	10.0
1919	住宅新築の参考内容を主とした西洋館	不明	食堂兼主婦室	洋	東	4.5
1921	何んな住宅が欲しいか 翻訳された家	読者	食堂兼主婦室	洋	南	4.5
1921	何んな住宅が欲しいか 家族本位の簡易住宅	読者	居間兼主婦室	和	南	6.0
1922	理想と實際の小住宅 狭い臺所と別荘案	読者	主婦室仕事部屋	和	南	4.5
1923	住宅建築問答 亜鉛葺屋根の住宅	読者	主婦居間	和	南	9.0
1924	小住宅の間取と寢室の新しい設備	木檜恕一	主人主婦室	洋	南	10.0
1925	應接間はゴチック式食堂は純アメリカ式二階はオランダ式の家	不明	主婦書齋	洋	東	不明
1926	和洋折衷小住宅の設計を批判して (読者案)	読者	主婦部屋子供室	和	南	4.5
1926	和洋折衷小住宅の設計を批判して (修正案)	徳永庸	主婦室	和	北	4.5

表 4-2 「主婦室」などをもつ住宅一覧

ほとんどの「主婦室」などは和室であり、部屋の広さは4.5畳から10畳までばらついて
いるが、概して「子供室」や「仕事部屋」を兼ねるものは狭く、「主婦居間」には広いも
のが多い。

南面室が多く、とりわけ『婦人之友』誌読者の設計したものには南面室が多くなってい
る。1926年の「和洋折衷小住宅の設計を批判して」は、『婦人之友』誌読者設計の（読者
案）と、これを徳永 庸が修正した（修正案）であるが、二つの平面図を比較してみると、
「主婦部屋小供室」と「主婦室」との方位のとり方に違いがみられる。



『婦人之友』誌読者
和洋折衷小住宅の設計を批判して
（読者案）（1926）^{9）}*

徳永 庸
和洋折衷小住宅の設計を批判して
（修正案）（1926）^{9）}*

図 4-9 和洋折衷小住宅の設計を批判しての（読者案）と徳永 庸の（修正案）

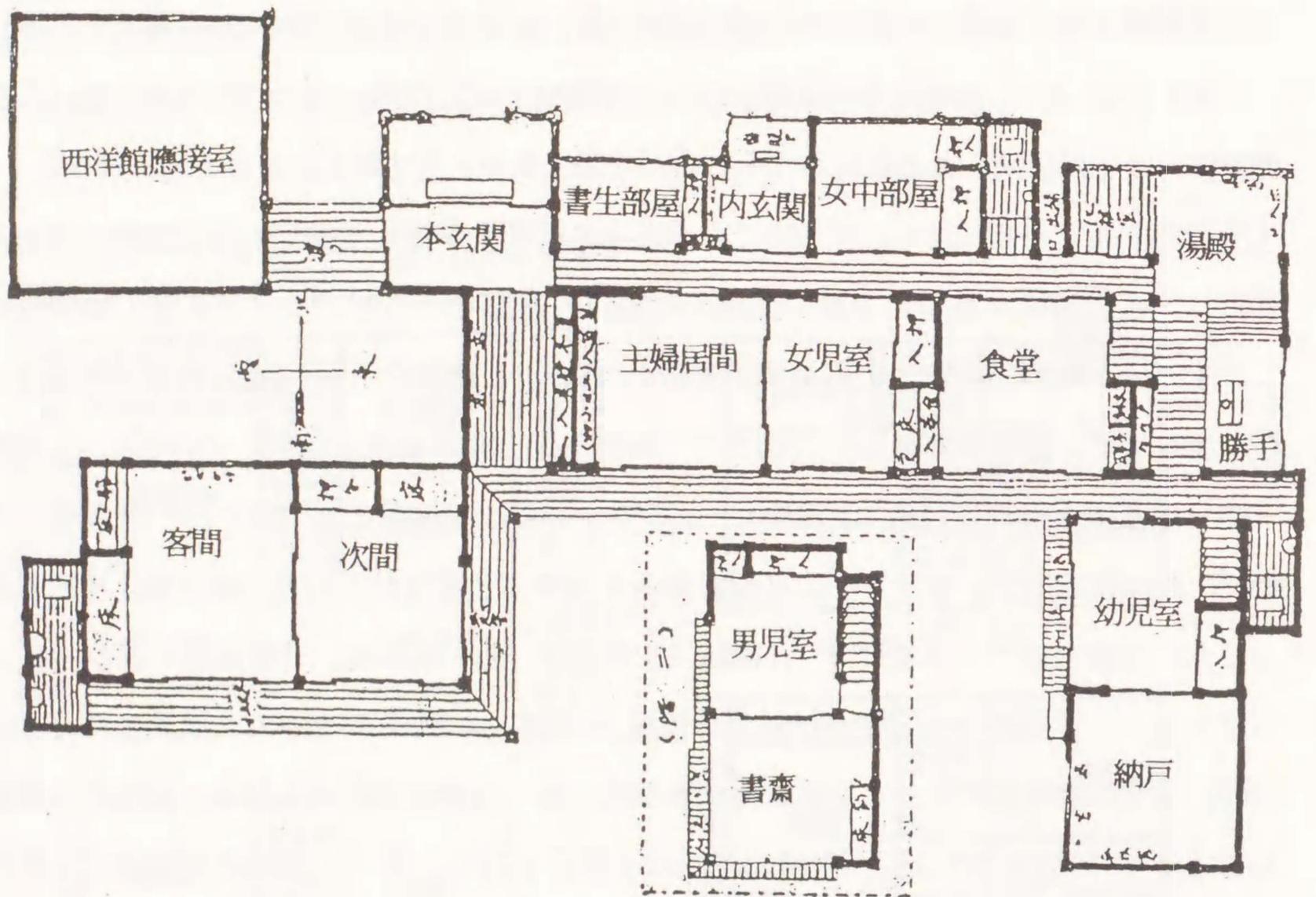
徳永 庸は、『婦人之友』誌読者の設計した平面図の方位の選び方について、「日常頻
繁に使用せられる室を日當りよき東や南の方位に撰び、浴室・便所・等は北側に配置した
ことなどは誠に要を得たもの」と評価している。そして、洋風の生活を営むには「家族が
集まって茶を喫しながら談話に興じたり時には夕食を取り得る程度の居間」が必要である、

として、(修正案)では一階に「食堂居間」をもうけ、「応接間」を北側にもってきている。しかし、二階をみると、(読者案)では「主婦部屋小供室」と「書斎」が南側にとられ、「客室」が北面室になっているのに対して、徳永 庸の(修正案)では逆に「客間」が南面にとられ、「主婦室」が北面室になっている。『婦人之友』誌読者のイメージする「主婦室」は「子ども室」も兼ねた「居間」か「茶の間」のような部屋であり、徳永 庸の「主婦室」は「主婦」の私室か仕事部屋のイメージに近いものであったと考えられる。

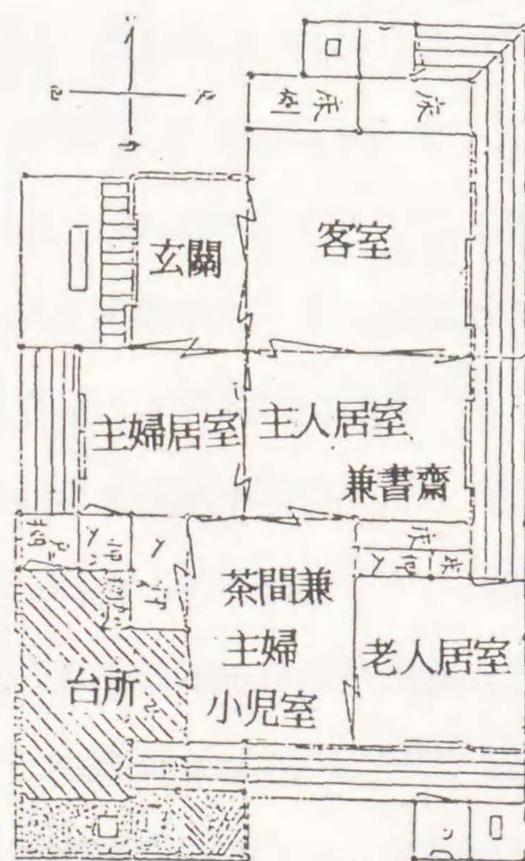
つぎに、表 4-2 や本文中の記事から、「主婦室」などの使い方についてみると、「主婦室」、「主婦居間」などとはいうものの、主婦の私室として使われていたものは少なく、「子供室」などを兼ねたものが多いことがわかる。本文中の「主婦室」などの使い方をみると、「子供部屋を兼ねた主婦の部屋」(1921.4.P51)のように、「子ども室」を兼ねたものや、「主婦の部屋は大抵茶の間と兼帯」(1911.10.P91)、「子供等も打寄って火鉢の傍に坐ります。かうして楽しい食後の一二時間を話し興じます」(1911.10.P93)、「居間一略一主婦室を兼ね」(1914.4.P85)、「居間は主婦の平常居る室であり、一家團欒する所で、洋風住家のリビングルームに相当するもので、日當りがよくて、衛生的な場所を選ぶと共に相當の廣さが必要です」(1926.12.P155)、「主婦居間 一家團欒の部屋ですから夏は涼しく冬は暖かく家中で一番よい部屋」(1930.11.P37)のとおり、家族のだんらん空間としての性格ももち、なかには「主婦部屋一略一は食事部屋にも用ゐ、赤坊のお晝寝もさせる」(1914.4.P74)、「主婦の居間は十分廣く取り、成べくは此の室で幼児も遊ばせ、裁縫もし、また親しい客なれば此の室で濟ませたい」(1914.4.P85)、「食堂は主婦の部屋を兼ね、家族の娯樂の場所にも」(1921.5.P61)、「茶の間は主婦の仕事室を兼ね、こゝで仕事をしながら子供の世話をする」(1923.11.P167)、「御飯も食べれば、子供も遊び、私の仕事もこゝでしお客様もこゝで」(1933.10.P92))のように、「居間」や「茶の間」や「食事室」のうゑに「乳幼児室」や「仕事部屋」を兼ねている様子が記述されている。また、「主婦室仕事部屋」や「散らかし部屋」という室名呼称もあり、「主婦の事務室」として椅子テーブルを入れ、小抽斗の多い箆笥を置くことを具体的に提唱したもの(1911.10.)や、「裁縫部屋」と書いて「しごとべや」と“るび”をふり、ミシンや戸棚などの設備をもった部屋を設けることを推奨したもの(1912.12.)もあり、「主婦は自分の居間から、居ながら家中を監督せねばなら」(1919.5.P32)ないことを説いたものもあり、「主婦室」などにはいわゆる「家事室」としての機能が重視されていたことがわかる。

こうしたことから、「主婦室」などは、「主婦」が子どもや家族の中心となり、家事や育児を担当・遂行するための部屋であり、「主婦」の私室という考え方はあまり強くなかったものと考えられる。それでも大正時代後期には、「主婦書齋」という室名呼称もみられるようになり、「主婦」のプライバシーへの配慮が感じられるものもでてくる。

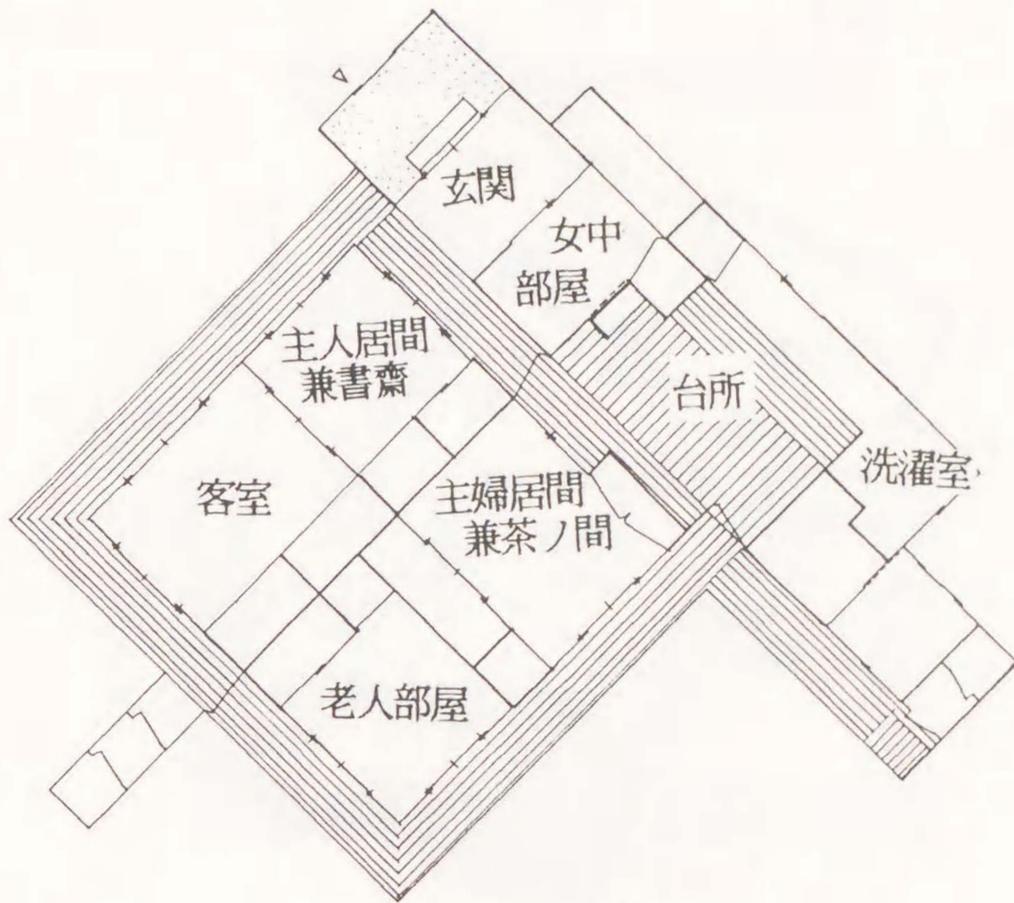
大正時代に「主婦」が注目されたといっても、個人の人格を認めて私室の必要性を議論するところまではいかず、あくまで家庭の中心となって立ち働く「主婦」像であったといえる。



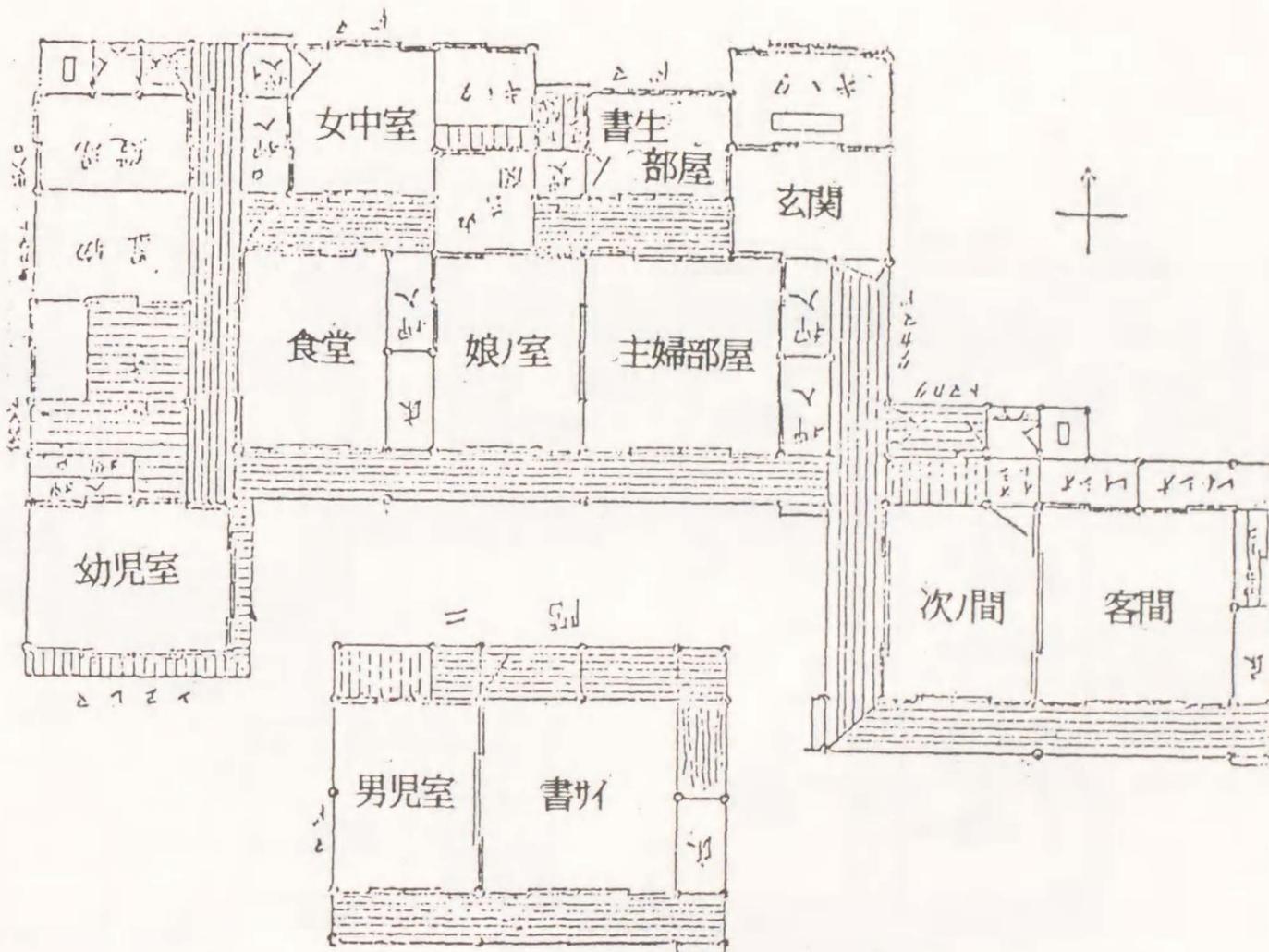
『婦人之友』誌読者 子供本位に建てられた家(1912)⁹⁾*



『婦人之友』誌読者 住みよき家の間取圖其六(1914)*



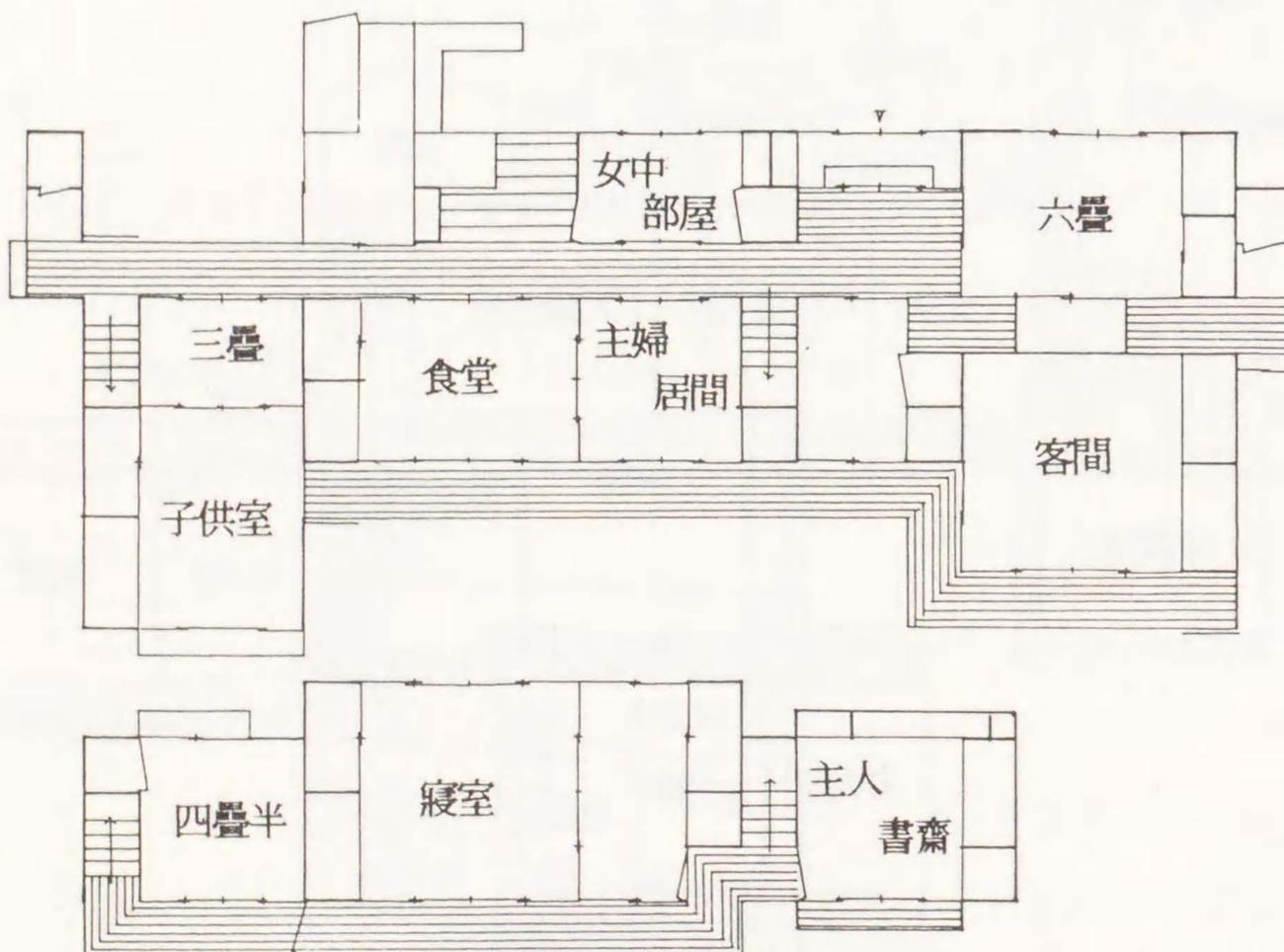
『婦人之友』誌読者 住みよき家の間取圖其十(1914)**



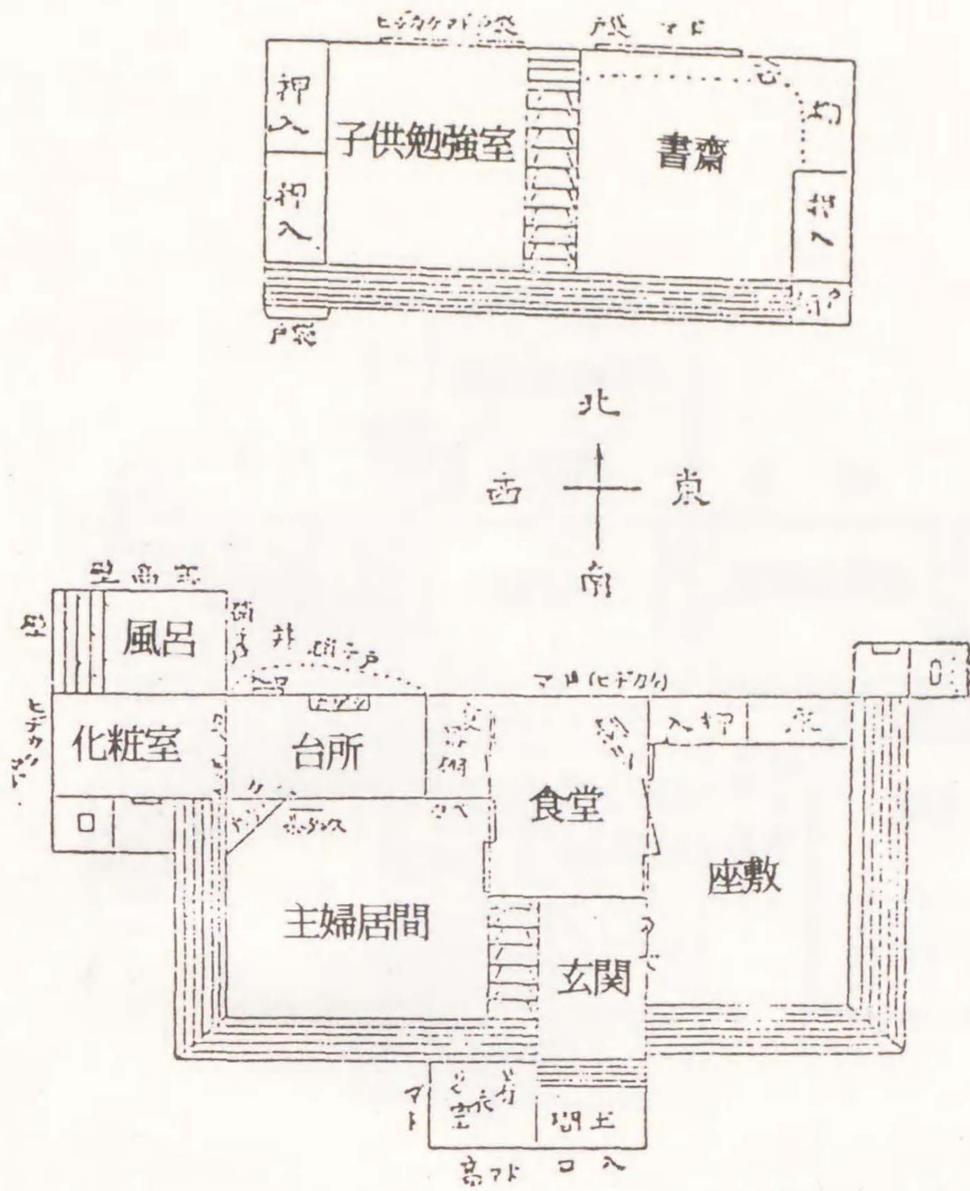
『婦人之友』誌読者 住みよき家の間取圖其十三(1914)⁹⁾*



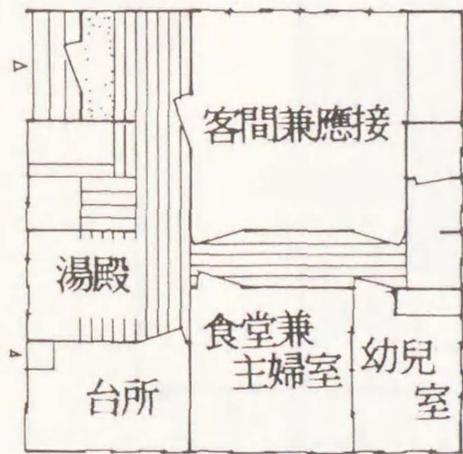
『婦人之友』誌読者 住みよき家の間取圖其十四(1914)⁹⁾**



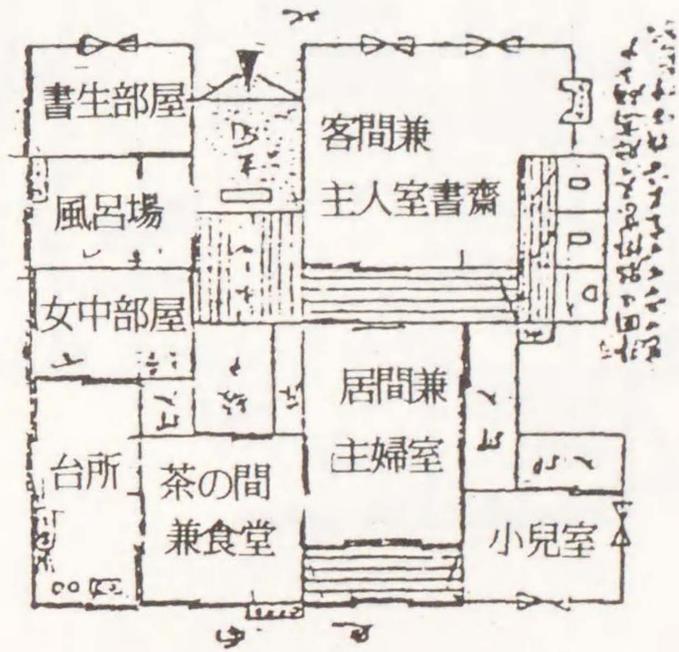
『婦人之友』誌読者 住みよき家の間取圖其十七(1914)**



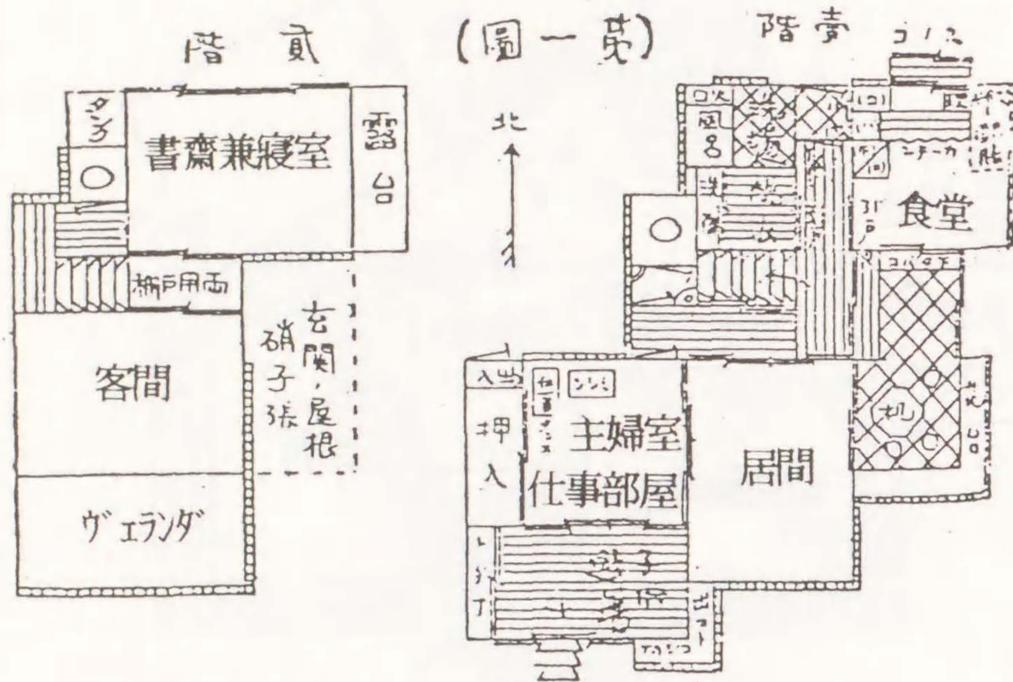
『婦人之友』誌読者 住みよき家の間取圖其十八(1914)⁹⁾*



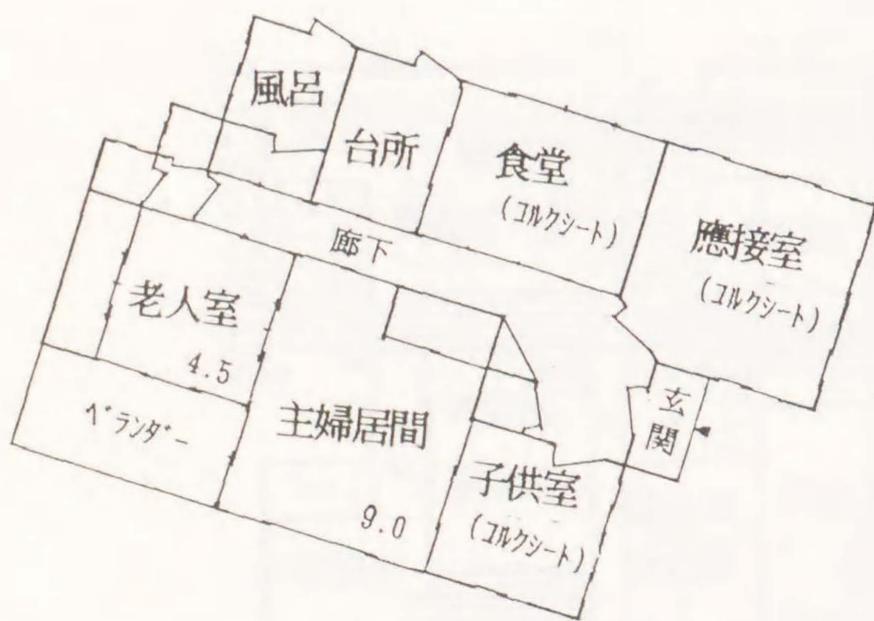
『婦人之友』誌読者
何んな住宅が欲しいか
翻訳された家(1921)¹⁰⁾**



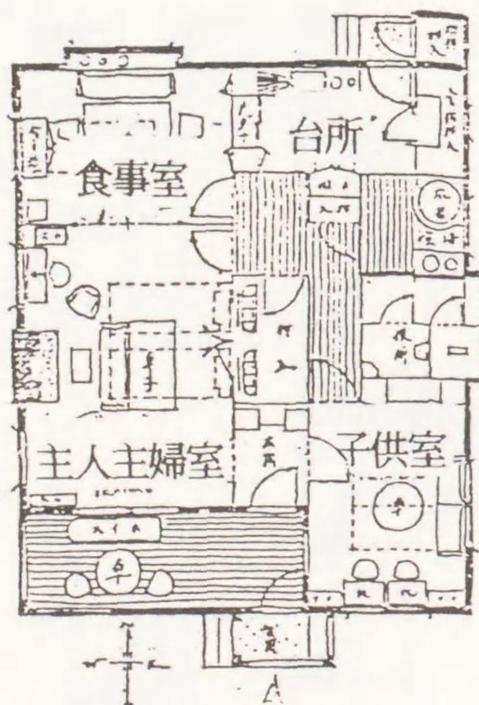
『婦人之友』誌読者
何んな住宅が欲しいか
家族本位の簡易住宅(1921)*



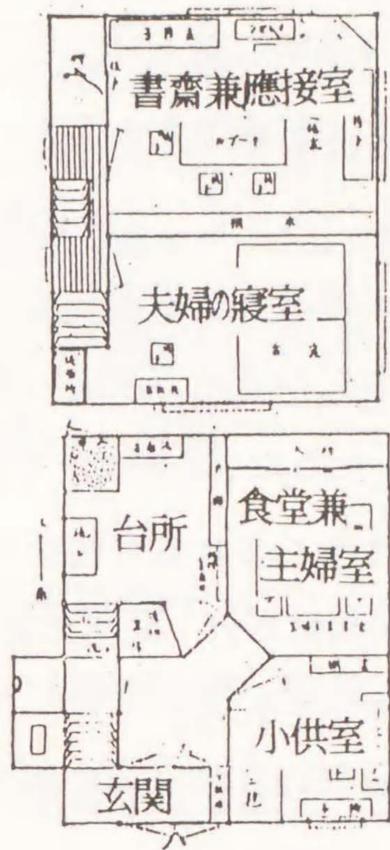
『婦人之友』誌読者 理想と實際の小住宅 狭い臺所と別荘案(1922)⁹⁾*



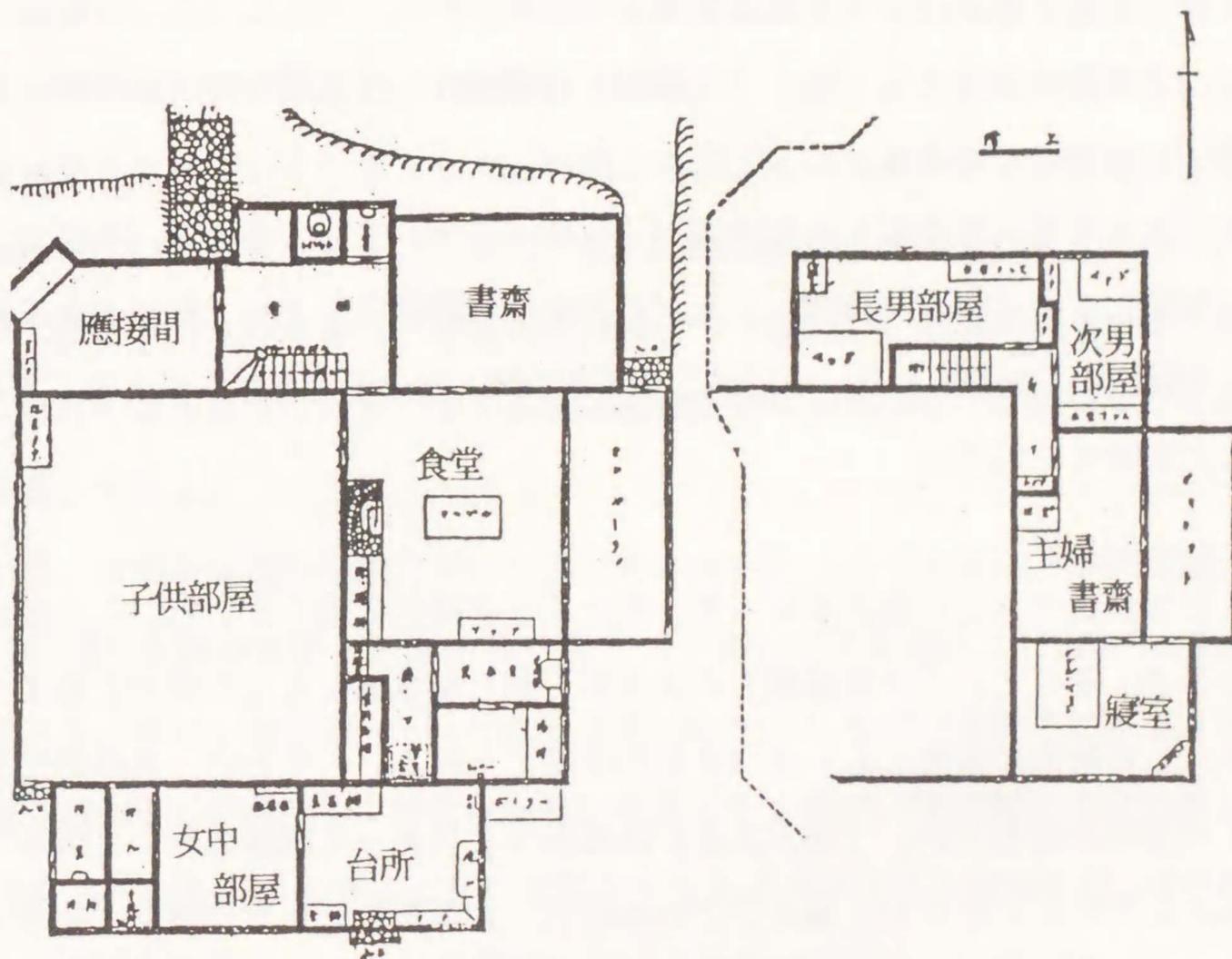
『婦人之友』誌読者
住宅建築問答
亜鉛葺屋根の住宅(1923)¹⁰⁾**



木檜 恕一
小住宅の間取と寢室の新しい設備
(1924)*



不明 住宅新築の参考 内容を主とした西洋館(1919)⁹⁾*



不明 應接間はゴシック式食堂は純アメリカ式 二階はオランダ式の家(1925)⁹⁾*

図 4-10 「主婦室」をもつ住宅の平面図例

以上のことから、昭和時代に入って、「主婦室」などがみられなくなるこの理由は、つぎのように考えられる。

第1番目の理由は、「主婦室」などの性格があいまいだったことである。

1917(大正6)年には三角錫子が「住宅」誌上で、「この部屋には絶対に子供などを入れないようにする。ここはお母様のお部屋ですから入ってはいけません。というように子供と約束する。主婦は一日一回ここへ入って、(昼食後の始末のついた時から三時頃まで)気分を變へて」と私室としての「主婦室」を提案しているが、『婦人之友』誌に掲載されている「主婦室」などは、私室としての考え方がはっきりせず、「主婦」が家事や育児をしながら子どもや家族の中心となるための「主婦室」であり、性格があいまいな部屋であったために、大正時代の中ごろからとりくまれる官民をあげての生活の合理化志向の傾向が強まるなかで、極端な生活の節約が求められ、性格のあいまいな「主婦居間」や「主婦室」の考え方が弱まっていったことが考えられる。

2番目の理由は、「主婦室」が思ったほど定着していなかったことである。

本研究の分析対象住宅の平均規模は30坪程度で、この時代の都市「中流」住宅の平均的な規模と一致しているが、室数にそれほど余裕がなかったために、実際には、「主婦室」が思ったほど定着していなかったことが考えられる。

そして、3番目の理由としては、「主婦室」の機能が、「居間」や「茶の間」などにとりこまれていったことである。

昭和時代に入ると、家族だんらん空間が「居間(洋室)」と「茶の間(和室)」とか、「居間(和室)」と「食堂(洋室)」などのかたちで複数化していく住宅が多くなるが、あいまいな機能の「主婦室」が、「居間」や「茶の間」などのどちらかにとりこまれていったことなどが考えられる。

知識人たちがあたらしい発想をもって、来たるべき時代に向けていろいろの積極的な提案をしたこと、そして、「中流階層」の人々がこれらを歓迎をもって受けとめようとしたところに、この時代の特徴ともいうべきものを感じとれる。とりわけ、具体的なかたちで「主婦」の空間が提案され、『婦人之友』誌読者などによって議論されたり試みられたりしているところは、いかにも主婦と子どもの時代・大正デモクラシー期だといえる。

しかし、また個の確立についての議論が十分には進んでいなかったり、住宅の室数に余裕がなかったりして、「主婦室」などが思ったようには定着しなかったということも、この時代の特徴である。あたらしい考え方や提案を定着させるほどには社会的な基盤が成熟していなかったために、十分には受け入れられなかったということであろう。

第9節 子ども部屋

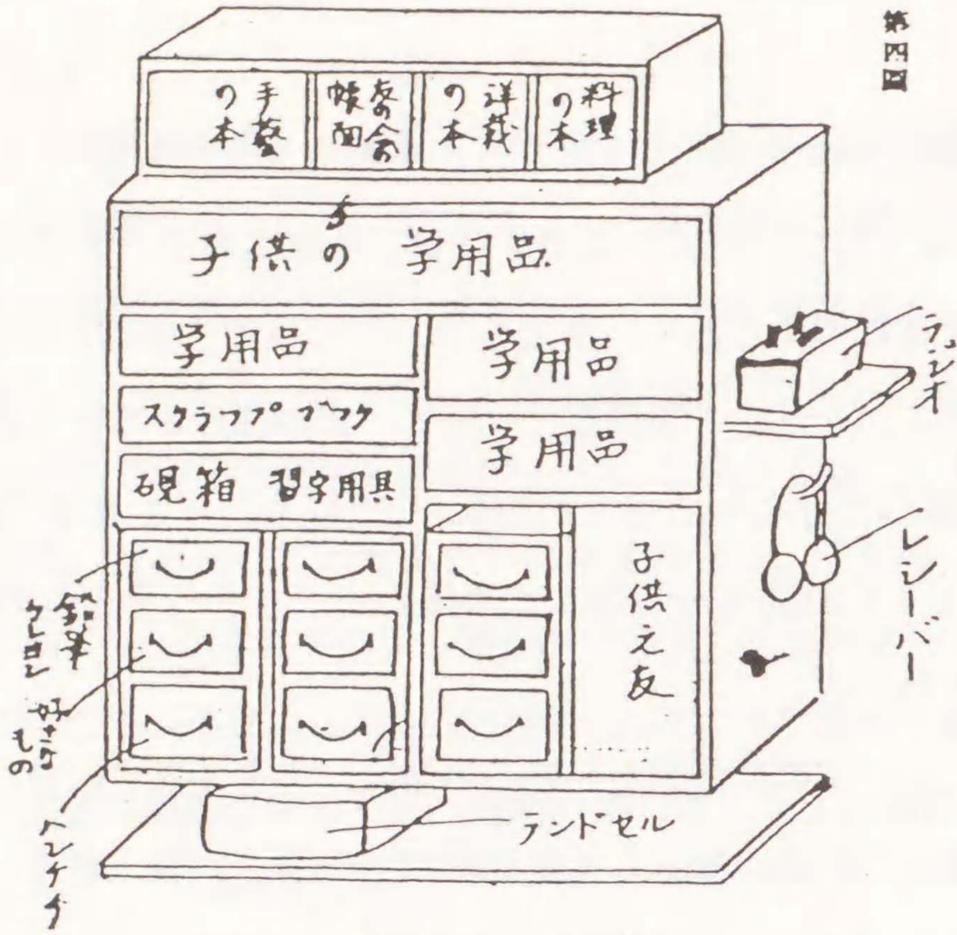
「子供本位に建てられた家」(1912.1.)、「彼等を自治に導く子供二人の勉強部屋」(1932.1.)をはじめとして、いくつかのグラビア写真もあり、子ども部屋の記述は多い。子どもの生活が大切に考えられていたようで、「すべて子供のため」(1912.1.P108)のような表現もみられる。しかし「子供などは殆ど一定の部屋を与えられず、而も客間にでも来て飛びはねて遊んでは叱られる」(1916.8.P24)や、「これまで虐待された子供室」(1921.4.P46)のような記述もみられ、この頃からようやく子どもの空間が注目されるようになった様子が見える。

「子ども室」についての具体的な記述の内容は、大きく3点に分けられる。第1の点は「自治に導く一略一子供達が獨立して生活全部(勉強, 衣服, 寝ること)が出来るように工夫した」(1932.1.グラビア)の記述やいくつかの持ち物整理用の戸棚や箆笥やベッドの工夫の紹介などからうかがわれるように、生活習慣の自立をめざしたものである。なかには、「試験の時などに二人の兄弟がお互いに邪魔にならないやう、どちらへお友達が遊びに来ても氣兼ねのないやうといふ考へから、二人の部屋をどちらも廊下から入れるやうにして夜具入も別々に付けました」(1917.6.P105)のように、「一室づつ獨立した」部屋をとる配慮も紹介されており、ようやくこの頃から子どもの自我や自立の問題にも目が向けられはじめたものと考えられる。しかし、兄弟姉妹共同の「子ども部屋」も多く、間仕切りも障子や襖というものもあり、個室はそれほど多くはない。意識の面ではようやくその萌芽がみられるようになったが、まだ具体的な住宅の平面図にまでは結びついていなかったということである。

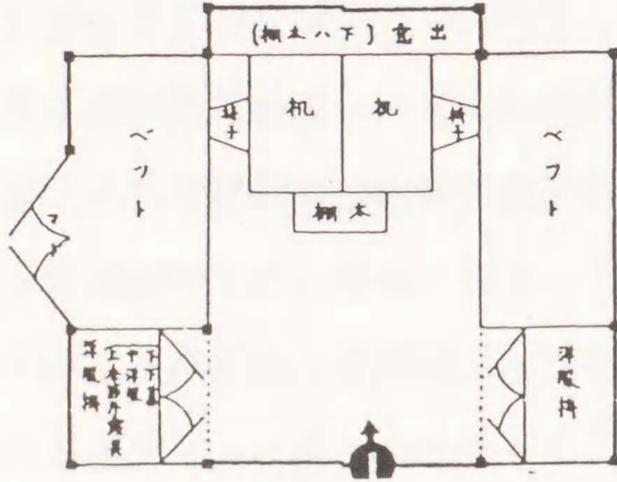
第2には、日照や通風の配慮について述べられていることである。「子供部屋の如きも所謂第二の國民を健全にする意味から、成るべく良い位置を選び」(1916.8.P25)や「日光のよく入る、明るい室が欲しい」(1915.3.P106)や「日光が一杯跳りこんできて、なかなか陽氣」(1926.4.P137)、「日當りを特に注意したもので、冬は暖かく夏は涼しい」(1921.4.P46)、「日光浴が出来るように周圍をすつかりガラスに」(1924.11.P97)などのように、日当たりや通風のよい子ども部屋について具体的に述べられている。

そして第3点目は起居様式に関するもので、「子供室は椅子式、コルク張り」(1923.11.P165)、「勉強部屋としては洋式が適當」(1932.1.グラビア)などのように、椅子式を求めているものが多い。

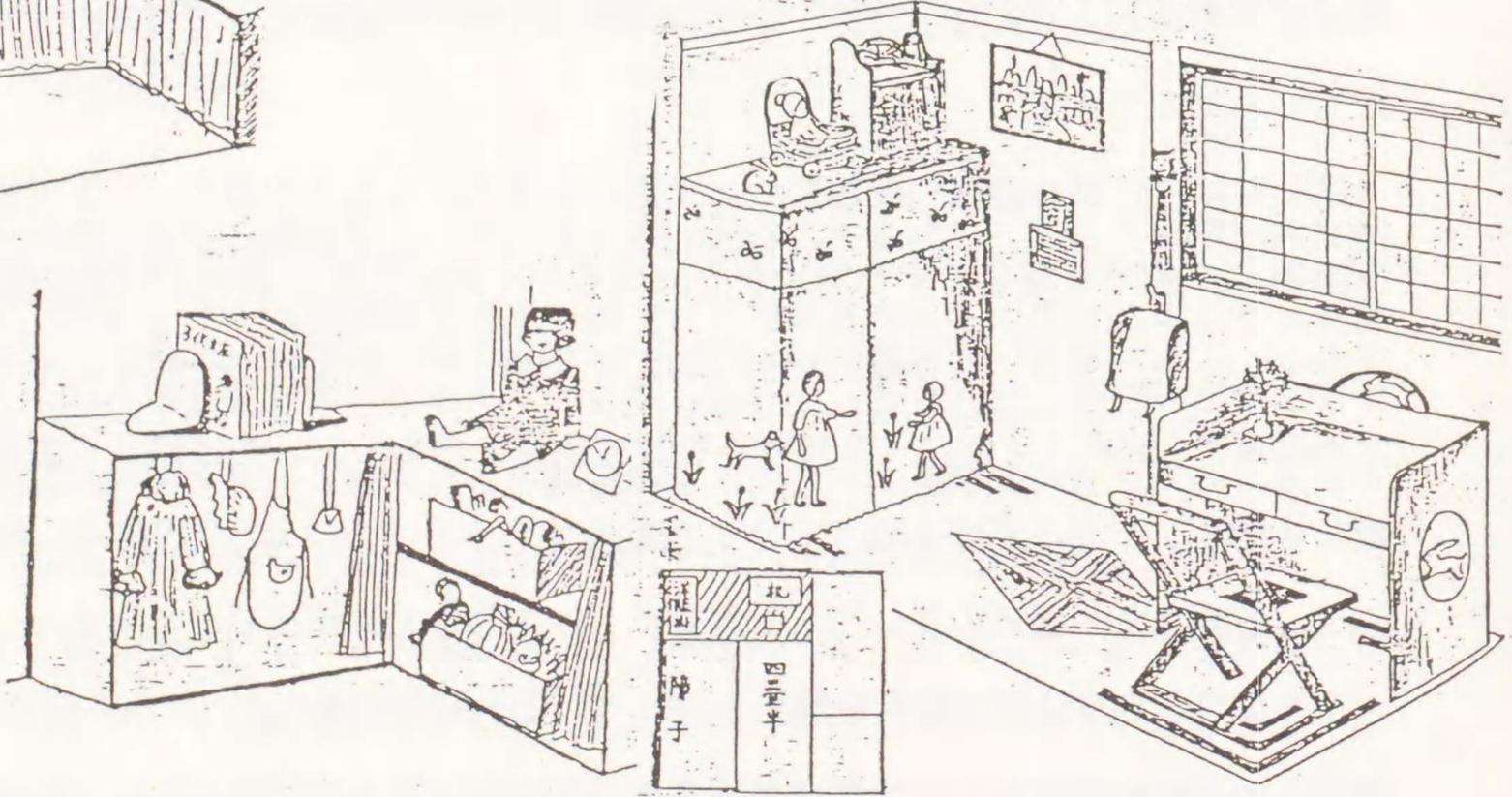
彼等を自治に導く
子供二人の勉強部屋

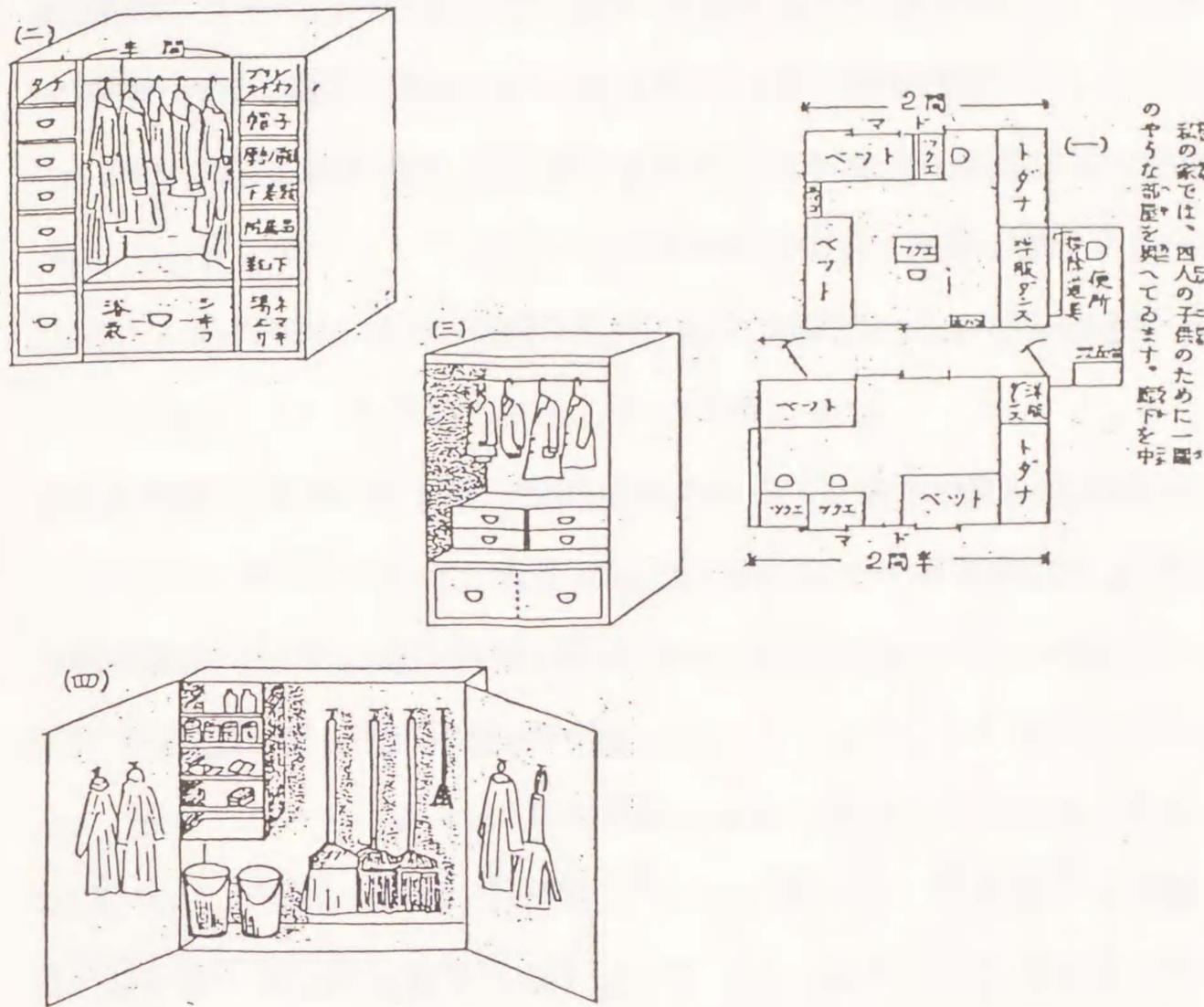


よけいなもの一つもない
中學生の部屋



愛可なんこて疊一みとた
すま來出が屋部供子とい





住みよいため
私の試みた工夫
 男の子二人、女
 の子二人の子供
 部屋

図 4-11 「子ども部屋」に関する記述

第10節 老人室

専門家の設計したものばかりではなく、『婦人之友』誌読者の設計したものにも、「老人室」がいくつかみられる。これも「子ども室」同様、「光線の能くさしこむやうに」(1914.4.P72)と、日照や通風の配慮について述べられているが、起居様式については「老人のある家では疊も必要」(1912.4.P20)、「すっかり洋風なので老人がどうしても聞き入れてくれません」(1926.7.P163)、「差當り老人や女中などが不便であらうと思ひ、老人室一略一を疊敷に」(1923.5.P94)のように、多くが坐式を求めている。

第11節 女中室

大正期を中心とするデモクラシー期の『婦人之友』誌に掲載されている住宅平面図のなかで、「女中室」などをもつことが確認できる住宅は、157例中55例（『婦人之友』誌誌

者が設計したもの25例，専門家が設計したもの22例，設計者不詳のもの8例）であり，「女中室」などをもたないことが確認できる住宅は，79例である。残る23例は，機能にもとづく室名呼称がなかったり，2階の平面図が省略されているために確認できないものである。「女中室」などの保有率（「女中室」などをもつ住宅数／（「女中室」などをもつ住宅＋「女中室」などをもたない住宅）×100）は約41％となる。

この時代の都市の「中流階層」に，どの位の「女中」が存在したかをあきらかにすることは容易ではない。

西川祐子，住まいの変遷と「家庭」の成立，日本女性生活史 第4巻 近代，東京大学出版会，12～13(1990)に，1888年から1889年にかけて滞日したアリス・ベーコンが *Japanese Girls and Women* (1891)に，「日本には裕福な家庭の数は少ないにもかかわらず，中程度の家にも召使が多く立ち働いていることを不思議に思っている」という記述があり，この頃には多くの家庭に「女中」がいた様子が伺われる。

また，永畑道子，炎の女，新評社，45(1981)には，大正時代の新聞・雑誌に“女中払底”の記事が多いことが記されており，（平塚）らいてうも『婦人公論』1919年1月号に「現代家庭婦人の悩み」と題して，この時代の「女中」事情を書いている。「……いわゆる近代文明がもたらした産業革命は，今日ついに私たちの家庭から，私たちの家庭に必要な一家事一切の雑事から子供の世話まで主婦や母を助けて，若しくは代ってしてくれた必要な助手である女中といふものを，工場の方へ奪っていってしまいました。一略—これからは，若い娘達は気づまりな女中奉公から工場の方へと，彼女等の多くが転じていくにムリもありません。」

明治時代のおわり頃から工場に働きに出る女性が増え，大正期を中心とするデモクラシー期には，「女中」が払底しはじめていた様子が伝わってくる。

しかし，東京市が職業紹介事業のためにおこなった調査の結果をまとめた『婦人職業戦線の展望』（1931年12月）には，「女中は，今日なほ數多の家庭に存するものであるが，これは限定された意味での職業婦人には這入らない」として，「女中」は調査の対象に入っていないので，階層別に「女中」の有無を把握することは困難である。

ただ，1920年の国勢調査報告によれば，東京市の世帯総数は，456,935世帯，男女総数2,173,201人（うち男1,171,184人，女1,002,017人）であり，そのなかで「家事使用人」は77,049人（うち男5,463人，女71,586人）となっており，大正時代の中頃には，東京市に7万人余の女性の家事使用人がいたことがわかる。

1921年8月号の『婦人之友』誌に、弁護士の布施辰治が「東京市の人口及び住宅関係の統計」によって、持ち家は約6万戸であると述べているから、少なくとも1920～1921年頃の東京市には、持ち家総数をこえる数の女性の家事使用人がいたことになる。

『婦人之友』誌に掲載されている住宅の多くは持ち家であり、投稿者の居住地の多くは東京であるとはいうものの、そのまま東京市の持ち家の状況と比較することはできない。しかし、当時としては、『婦人之友』誌に掲載された住宅の「女中室」保有率が、高いものではなく、むしろ低めであることは推測できる。

「女中室」などをもつもの55例の実態について、一覧表に示すと表4-3のとおりである。

設計者の別に「女中室」などの保有率をみると、『婦人之友』誌読者が設計したものでは約33%であり、専門家が設計したものでは約44%である。専門家が設計した住宅の方が、「女中室」などの保有率がやや高い。

年	記事表題	設計者	建坪 (坪)	室名呼称	和洋	(畳)
1911	天然を利用した建築	橋口 信助	76.0	女中室	和	6.5
1912	子供本位に建てられた家 (藤田譲邸)	読 者	81.0	女中部屋	和	4.5
1914	住みよき家の間取圖其五	読 者	46.0	女中部屋	和	3.0
1914	住みよき家の間取圖其七	読 者	40.0	女中部屋	和	3.0
1914	住みよき家の間取圖其八	読 者	24.0	下女部屋	和	2.5
1914	住みよき家の間取圖其十	読 者	38.0	女中部屋	和	3.0
1914	住みよき家の間取圖其十一	読 者	73.0	女中部屋	和	6.0
1914	住みよき家の間取圖其十三	読 者	66.0	女中室	和	4.5
1914	住みよき家の間取圖其十五	読 者	44.5	女 中	和	4.5
1914	住みよき家の間取圖其十七	読 者	62.0	女中部屋	和	3.0
1916	伊東工學博士の新築住宅	不 明	77.0	女中部屋	和	4.5
1917	廿八坪の地面へ便利で器用な家	読 者	31.0	女中部屋	和	3.0
1917	趣味的に建てられた石井柏亭氏のお家	不 明	48.0	女中室	和	3.0
1919	住宅新築の参考 居ながら家中を見通す家	読 者	39.2	女中部屋		2.0
1921	何んな住宅が欲しいか お客に偏した家	読 者	26.5	女中部屋	和	4.5
1921	何んな住宅が欲しいか お客に偏した家	読 者	26.0	女中室	和	3.0
1921	何んな住宅が欲しいか 家族本位の簡易住宅	読 者	27.0	女中部屋	和	3.0
1921	何んな住宅が欲しいか 暖かさうな小洋館	読 者	47.0	女中部屋	和	4.5
1921	何んな住宅が欲しいかニ私の望んでいる住宅	読 者	39.0	女中室		3.0
1922	文化村の出品家屋	吉永 京蔵	23.0	女中部屋		3.0
1922	電気の家	不 明	86.0	女中室	和	3.0
1922	理想と實際の小住宅 惣本家としての隠宅	読 者	24.5	女中室		2.5
1923	わたくしどもの家 (武井千代)	埴谷長次郎	32.5	女中室	和	3.0

年	記事表題	設計者	建坪 (坪)	室名呼称	和洋	(疊)
1923	住宅建築問答 日本室よりも洋館に	読者	50.0	女中室	和	3.0
1923	住宅建築問答 小さな西洋館	読者	32.5	女中室	和	4.0
1923	住宅建築問答 衛生的な住宅	読者	44.0	女中室		3.0
1923	住宅建築問答 郊外へ建てる家	読者	22.5	女中室	和	2.0
1923	住宅建築問答 雪國の住宅建築	読者	51.5	女中室	和	4.0
1923	住宅建築問答 洋風住宅の私案	読者	39.0	女中室		3.0
1924	住宅小品15種 一文字の家 安成氏の家	遠藤 新	22.0	女中室		3.0
1924	住宅小品15種 一文字よりT字に 静かな書齋の家	遠藤 新	25.0	女中	和	3.0
1924	住宅小品15種 一文字の家の変化その1	遠藤 新	23.0	女中室		3.0
1924	住宅小品15種 一文字の家の変化その2	遠藤 新	22.0	女中室	和	2.0
1924	住宅小品15種 三間幅の家と子供達の寄宿舍	遠藤 新	22.0	女中室	和	3.0
1924	住宅小品15種 三間幅の家の変化(二)	遠藤 新	33.0	女中室		3.0
1924	住宅小品15種 二階陣の町の家	遠藤 新	43.5	女中室	和	4.5
1925	住宅小品2種	遠藤 新	44.0	女中	和	3.0
1925	應接間はゴシック式食堂は純アメリカ式 二階はオランダ式の家	不明	不明	女中部屋		4.5
1926	家族八人の住宅設計の批判(修正案)	徳永 庸	34.0	女中室		3.0
1927	砧村に建てた私たちの家 らいてう	大内 章正	26.0	女中室		3.0
1927	真鶴の海岸に建った三宅克己氏のお住ひ	不明	37.0	女中部屋	和	3.0
1927	三四千円でできる小住宅設計 高橋 泰氏の住宅設計	遠藤 新	31.0	女中室	和	3.0
1927	石原さんの家	遠藤 新	51.0	女中室	和	3.0
1928	家を建てるまで 素人設計で出来た我家	読者	42.2	女中室	和	3.0
1929	中河興一氏の家	他	38.0	女中部屋	和	3.0
1929	新しい木綿の浴衣の家(羽仁家)	遠藤 新	28.0	女中室	和	3.0
1929	趣味の家工夫の家 大和村に建った安藤氏の新宅	不明	38.5	女中部屋	キルク	3.0
1930	住み方さまざま 七坪半の家から	不明	13.0	女中部屋		3.0
1931	南澤に建った大脇さんの家	土浦 亀城	37.0	ジョチュウツ		3.0
1931	二十二坪の住居(遠藤 新自邸)	遠藤 新	22.0	女中室	和	3.0
1932	夫婦共同設計の明るい無駄のない家	土浦 亀城	35.0	ジョチュウツ		3.0
1932	南澤の美しい林の中に建った田中さんの家	遠藤 新	35.0	女中室		3.0
1933	私共の家	読者	19.0	女中室		3.0
1934	小住宅展覧會同潤會江古田分譲住宅をみる 3号	同潤會	26.0	女中室	和	3.0
1934	小住宅展覧會同潤會江古田分譲住宅をみる 4号	同潤會	32.0	女中室	和	3.0

表 4-3 「女中室」などをもつ住宅一覧

大正期を中心とするデモクラシー期には、『婦人之友』誌掲載住宅の「女中室」などの保有率はほとんど変化していない。とりわけ専門家が設計した住宅の平面図では、どの年にも半数弱の住宅が「女中室」などを保有している。『婦人之友』誌読者の設計したものでは、1919年頃までは比較的「女中室」などの保有率が高いが、その後やや低くなる傾向にあるといえることができる。

また、「女中室」などをもつ住宅の規模について、『婦人之友』誌掲載住宅全体の規模と比較してみると、前者の平均は約38.8坪であり、後者の平均は約31.9坪であるから、比較的規模の大きな住宅に「女中室」などをもつものが多いことが考えられる。実際に「女中室」などをもつものには、建坪40坪以上の住宅が19例あり、65坪以上の住宅も6例みられる。しかし、20坪台の住宅でも16例が「女中室」などをもっており、規模の小さな住宅であっても「女中室」などをもつものがあったことがわかる。

『婦人之友』誌掲載の「女中室」などの広さは、2畳から6.5畳までばらついていて、3畳のものが全体の約65%を占めている。また、55例中37例は、畳の表示があったり、日本間、タムミなどの表示や「○畳」などの表示のある和室である。さらに、住宅全体のオリエンテーションがわかる住宅の「女中室」などはほとんど北面に位置している。

つまり、大正期を中心とするデモクラシー期の『婦人之友』誌掲載住宅の「女中室」などについてまとめると、つぎのとおりである。

『婦人之友』誌読者の設計した住宅よりも専門家の設計した住宅の方に、小規模な住宅よりも比較的規模の大きな住宅の方に、「女中室」などをもつ住宅が多いという傾向がみられるが、『婦人之友』誌読者の設計したものでも、またそれほど規模の大きくない住宅にも「女中室」などの存在がみられることから、全体として「女中」の払底が社会的な関心になっていたとはいっても、少なくとも『婦人之友』誌読者層には、「女中室」などは比較的広く普及していたものと考えられる。

そして、この時代の『婦人之友』誌にみられる女中室の具体的な様子はといえば、北向きの3畳間の和室が多かった。

第12節 台所

台所については『婦人之友』誌にたくさんの記述がみられる。まず家族本位の主張のなかで、「家族の住むに便利な」(1916.8.P24)住宅が求められ、「これまで虐待された臺

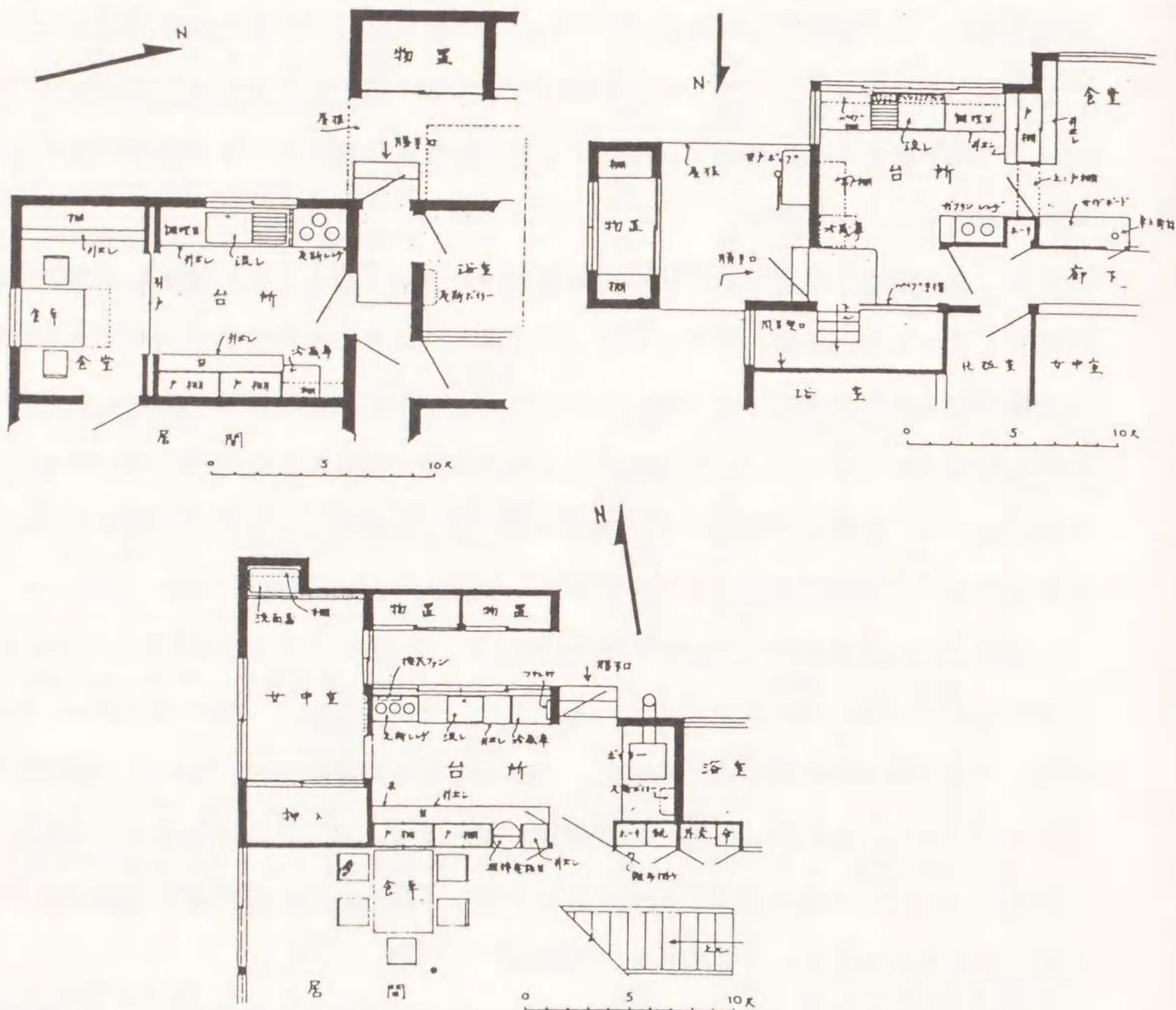


図 4-12 台所の平面図例

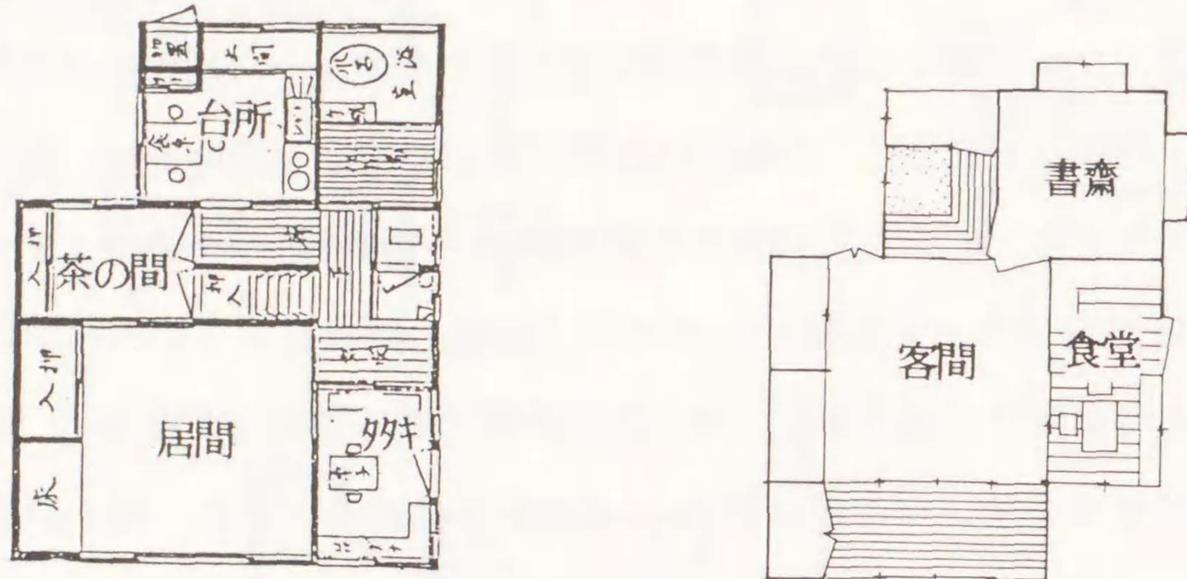
所」(1921.4.P48)をみなおし、「一家の生命の源たる大事な臺所を優遇して、光線や空気を十分入れ、且つ便利に改良を加へ」(1916.8.P25)ることが提唱される。

具体的には、第5章でも述べるが、「臺所改善の目標—略—第一に臺所の採光」(1929.6.P71)、「明るい所ほど黴菌が少ないといふことです。病は口からといひ、食物の調理所である臺所はぜひ日照を必要とするわけです—略—子供部屋寢室などを犠牲にしない限り臺所は出来るだけ南向きの位置をとりたいたいものです。併し実際には全くの南向きの位置を取るのは困難なことが多くあります。東又は西向の臺所である場合、窓を三角に突出せば、南の光線がとれ、また窓の廣さも大きくなり、通風にもよく、窓際に流しを作ればいつも日光と風とで心地よく乾くでせう」(1928.10.P62)、「臺所—これは出来るだけ南側にもってゆきたく思ひます—調理という重大な役目をもってゐて出来るだけ光線を多量に

取り入れ不潔物等が一寸あっても気が付くやうにしたい事と流し元を十分な日光で常に乾燥させたいため」(1929.10.P119)のように、日照・採光の大切さが述べられ、「お臺所の真中一略一の天井を、凡そ五尺四方位くり抜いて、其所だけズッと屋根より高く突き出して、四方共ガラスで張つてあります。但し一方だけは下から引つ張つてある細引の伸縮で、横に開けたり閉ぢたり出来るやうになつて居ります。つまり其所が風通しになるのです。一略一餘程高くなつて居ると、四方がガラス張りですから、屋根はあつても光線は充分に取れます」(1913.3.P108)、「臺所は西南に面した景勝の地を占め、南と西と兩方から十分光線が入りますし、それに天井際に高く磨硝子^{すりガラス}小窓を取つてありますから、隅々まで遺憾なく光線が届きます」(1916.8.P98)、「南側の兩角をとって六角形の臺所としましたので、南の日を受ける部分多く、且つ狭い距離に廣い道具立が出来て、動作經濟からも有利になつて居ります」(1919.5.P30)、「南をうけてゐる上に、壁も戸棚も全部白ペンキを塗りましたから、明るく気持ちよい働き場になつてゐます」(1932.1.P59)と、方位や窓のとり方の工夫がさまざまに記述されている。実際に『婦人之友』誌読者の設計した住宅で南面の台所をもつものが少なくとも10例はみられる。なかには、「臺所、浴室、化粧室を東南の最上位に置きましたことは、専門家の反對がございましたが、主婦の働き場としての臺所を、冬暖かく夏涼しく明るい便利な場所に」(1928.4.P105)と主張した『婦人之友』誌読者の記事もある。「今日のように冷蔵設備が行届いて來ますと日當りの良い方が乾燥してよく」(1926.9.P101)という指摘もあるが、実際には「殆ど冷蔵庫ほどに保存することが出来る、深く掘り下げた食品貯蔵室」(1917.3.P107)や「冷蔵器(井戸につけるトタン製の箱)」(1928.10.P65)、「流しの下は網戸にして中は鼠を防ぐためブリキ張り。野菜を入れて」(1932.1.P60)おくなどの工夫も紹介されており、冷蔵設備はそれほど十分ではなかったようで、食品の貯蔵には苦心していたと考えられる。それでもそれ以上に「衛生的で一略一室内の採光を充分にして明快にすること」(1926.9.P99)への要望が強かったことがわかる。

第2には、能率性が求められており「(西洋の)臺所の如きは、すべて日常の必要から割出され、随分大きな家でも思ひの外狭く、中央に立つて居て一寸足を動かすだけで、四方の棚に手の届く」(1912.4.P26)、「臺所は餘り廣くても足數ばかり運んで能率が悪くなりますし、狭すぎれば不自由になりますからその家に合ふやうに」(1929.10.P119)などの点が述べられている。ちなみに南面台所をもつものは、専門家の設計したものでは2例、設計者不詳のものには4例みられる。

このこととも関連して、臺所の板張り部分に折り畳み式の食卓を設置した、いわばダイニングキッチンのはしりのようなスタイル(1916.6.P112), (1928.10.P107)も紹介されている。「食堂を臺所の延長と見ないで、物の置き方や装飾に工夫することによって、寧ろ臺所を食堂に撮り入れた形にしたい」(1928.10.P107)という指摘がある点にも注目しておきたい。



簡易生活から割り出した住宅(三角錫子邸)
(1916)*

設計者不詳
九百五十圓で出来た家(1928)**

図 4-13 台所と同室の食事室をもつ住宅の平面図の例

注および引用文献

- 1) 内田青蔵, あめりか屋商品住宅, 住まいの図書館出版局, 163(1989)
- 2) 『家庭之友』, 第一巻第一号, (1903)
- 3) 婦人之友社, 創立者の歩んだ道 婦人之友小史, 18(1968)
- 4) 日本家政学会編, 家政学事典, 朝倉書店, 790(1990)
- 5) 木村徳國, 北大工学部研究報告, 18, 50(1958)
- 6) 木村徳國, 北大工学部研究報告, 21, 54(1959)
- 7) 西山卯三, 日本の住まいII, 勁草書房, 51(1976)
- 8) 町田玲子, 主婦の個室, 奈良女子大学住生活研究室編, 住生活と住教育, 彰国社, 30(1993)
- 9) 「主婦室」などをもつ住宅でも, 「主人室」をもたないものが意外に多いが, これらの住宅の多くは「書齋」をもっており, これが「主人室」の機能をはたしていたものと考えられる。
- 10) それでも, 「主婦室」などをもつ住宅でも, なかには「主人室」も「書齋」ももたない住宅があり, このことから, 「主婦室」が私室としてというより, 「居間」や「茶の間」や「子どもの遊び部屋」や「仕事部屋」などを兼ねる部屋だと考えられていた様子がうかがわれる。